

近代日本版画家名覧 (1900－1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
清水久男（大田区立郷土博物館学芸員）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (3)

【う】

上崎正三 (うえぎき・しょうぞう)

当時中学生の根市良三、柿崎卓二、佐藤米次郎によって発行された青森での最初の版画誌『緑樹夢』(1930～1931)の第2号〔1930.9〕に《つる》を發表する。『緑樹夢』は第2・3号のみ確認されている。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

上田眞吾 (うえだ・しんご) 1901～1994

1901(明治34)年1月14日京都市中京区烏丸二条上ル秋野々町522番地に生まれる。村上華岳の示唆により1930年から「神護」と号する。1924年京都市立絵画専門学校を卒業。国画創作協会に出品するようになり、同年の第4回展に素描2点、翌1925年の第1回春季展に日本画1点と素描2点、1926年の第5回展に素描1点が入選。1928年の国画創作協会第一部解散後は、同会に出品していた若手の作家たちが結成した「新樹社」に参加し、1929年の第1回展に日本画7点、翌1930年の第2回展に日本画1点、写生7点の他、木版画《冬の湖》《秋の洛北》《オランダ皿》《秋の草花》《花》の4点を出品。この時、「神護」を初めて名乗っている。1931年の同会の解消後は、団体展から離れ、個展や画会を中心に作品を發表。戦後は、1965年に岡本宇太郎、井上通世らと京都で「玉樹会」を結成し、1988年まで毎年展覧会を開いた。1994(平成6)年9月19日京都府綴喜郡田辺町興戸で逝去。【文献】『国画創作協会の全貌』(光村推古書院 1996)(三木)

上田隆夫 (うえだ・たかお)

『エッチング』第15号(1934.1)にエッチング《[風景]》の図版が掲載される。当時、神戸の御影師範2年生で、「上田君の神戸風景山の描写がいい」の作品評がある。【文献】『エッチング』15(樋口)

上田忠敏 (うえだ・ただとし) 1910～2005

1910(明治43)年2月大分県宇佐郡駅館村上田(現在の宇佐市上田)に生まれる。1929年大分県師範学校本科第二部卒業。その後、大分県長洲小学校、宇佐小学校に勤務し、1935年には大分県師範学校訓導となる。宇佐小学校に勤務していた1934年8月に、大分県師範学校主催で講師西田武雄により行われたエッチング講習会(『エッチング』22 1934.8)に参加。その後、1937年8月に別府市教育委員会主催、講師西田によるエッチング講習会(『エッチング』58 1937.8)にも参加し、エッチング技法を修得する。その間の1935年8月には大分県師範学校主催の創作版画講習会(講師平塚運一)に参加し、木版画技法も習得。この講習会で制作した《河畔》が、講習会記念号である『九州版画』第8号(1935.10)に掲載されている。以降同誌には17・20号を除き最終号の24号(1941.12)まで木版画を發表。戦後は大分県内の小学校長や大分県指導主事、四日市中学校長などを歴任、1973年大分大学教育学部附属中学校総務を最後に退官。大分エッチング協会会員(『エッチング』47 1936.9)、大潮会会員、大分県水彩画協会会員、大分県

美術協会名誉会員。著書に『青いノート』などがある。2005(平成17)年逝去。【文献】上田忠敏『紫のノート』(上田忠敏〔出版〕1984) / 『福岡市美術館所蔵目録』(1992) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

上田徹雄 (うえだ・てつお)

1940(昭和15)年4月の紀元二千六百年奉祝第27回日本水彩画会展に《扉と櫓》《牧場の窓》《精養軒通り》(各石版画の下絵として)を出品。石版画は未見。また、同年11月の一水会第4回展には油彩画1点を出品している。【文献】『紀元二千六百年奉祝 27日本水彩展目録』(1940) / 『日本美術年鑑』昭和十六年版(美術研究所 1942)(三木)

上田隆一 (うえだ・りゅういち)

小野忠重発行『新版画』第1号(1932.6)に上田隆の名前で木版《夜汽車》、第3号(1932.8)に上田隆一の名前で木版《マッチペーパー》、第5号(1932.10)に上田隆一の名前で木版《靈南坂》を發表。刊行年は不明だが、新版画双書第七輯として新版画集団から『上田隆一集』刊行の記録が残るが、未確認。【文献】『創作版画誌の系譜』 / 『版画家名覧』(山田書店版画部 1982)(樋口)

上野斌郎 (うえの・あきお) 1895～1972

1895(明治28)年12月6日千葉県佐倉並木町に生まれる。数え年3歳のときに母親が亡くなったため、父親は洋画家都鳥英喜の姉と再婚。10代には庄野宗之助に洋画を、倉田白羊にデッサンや水彩を師事する。17歳の頃、叔父の都鳥英喜宅より関西美術院に通い、都鳥英喜や鹿子木孟郎の指導を受ける。関西美術院第7回競技会(1913)のデッサン部門で3等賞を受賞。1914年大阪三越図案部に入社し、大阪高島屋宣伝部を経て1925年には東京の工芸印刷会社に勤務を移す。また本郷絵画研究所でデッサンを教える。1926年には新染同人会を結成し、染色工芸の道を歩みはじめ、光風会や春台美術を中心に戦前、戦後を通して作品を發表し、染色家として名を残した。1972(昭和47)年逝去。版画は1938年に東京吉祥寺で発行された版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《多摩川風景》を發表する。因みに日本画家・上野泰郎は子供(長男)。【文献】『染色家 上野斌郎展』図録(佐倉市立美術館 2000)(加治)

上野維信 (うえの・これのぶ)

東京美術学校の学生同人グループのひとつ「デ・ザミ」同人で、同校油絵科3年在籍中、高田(浜田)知明、遠藤健郎らとともに田辺至、松田義之らが指導する版画教室エッチング部に所属する。【文献】『エッチング』57 / 『グループ〈貌〉とその時代展』図録(郡山市立美術館 2000)(樋口)

上野悦郎 (うえの・えつろう)

木口木版の「芝築地派名簿」に芝築地月舟(栄二)門弟としてその名あり。「山形県酒田」の出身ということが判っているだけである。【文献】芝築地三郎「私が知っている限りの日本の西洋木版の歴史」『町田市立国際版画美術館紀要』4(2000)(岩切)

上野省策（うえの・せいさく） 1911～1999

1911（明治44）年7月1日新潟県新発田市万町甲の254番地に生まれる。1929年東京美術学校図画師範科に入学。1933年同校を卒業し、小学校の美術教師として東京で教職に就く。1937年の『エッチング』第61号（1937.11）にエッチング研究所製のエッチングプレス機所有者として紹介されているが、作品は未見。1939年の第14回国画会に油彩画が入選。1941年から1943年までは新制作派協会に油彩画を出品している。戦後は、1945年に教職を辞し、画業に専念。一方で、夫人の名前で出版社「草木社」を経営し、近藤芳美の歌集『埃吹く町』（1948）の出版や、近藤や花田清輝らの著作の装丁も手がけた。1952年頃には関野準一郎が自宅に開いた銅版画研究所（1951年開設）に通ったこともあり、1953年に関野が駒井哲郎らとともに結成した「日本銅版画家協会」に参加している。1953年に自由美術家協会会員となり、晩年まで同会で活躍する一方、1961年から神戸大学教育学部で助教授・教授として美術教育を教え、1975年退官。『子ども美術館 16 ものをかく』（ポプラ社 1983）、『美術の授業 すべての子どもが生きる美術の指導 <現代教育 101選> 19』（国土社 1990）など美術教育に関する著書も多い。現存する版画は、1940年代後半と1950年代のエッチング、リトグラフが多く、1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレにはリトグラフ《夢》を出品している。1999（平成11）年4月7日逝去。【文献】『上野省策展』リーフレット（兵庫県立近代美術館 2000）/樽見博『古本通 市場・探索・蔵書の魅力』（平凡社 2006）/『エッチング』61 / 関野準一郎『版画を築いた人々』（美術出版社 1976）（三木）

上野真太郎（うえの・しんたろう） 1916～2012

1916（大正5）年宇都宮市池上町に生まれる。1929年当時川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に入学。3年生の時に同級生三森龍次の誘いで、同校生徒が発行していた版画誌『刀』（1928～1932）の第13号（1932）に『山の神秘』を発表するが、『刀』はそれ以降休刊となる。1934年同校を卒業。宇都宮市内の上野文具店会長を務め、2012（平成24）年に逝去。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）/『創作版画誌の系譜』（加治）

上野忠雅（うえの・ただまさ） 1904～1970

鳥居派七代にあたる鳥居清忠の高弟で、挿絵画家としても活躍し日本劇画協会同人。本名は上野克己。1904（明治37）年12月11日東京本郷森川町（尾沢蒼生堂薬局の長男）に生まれる。18歳で鳥居清忠に入門。歌舞伎の似顔絵肉筆画を学び、「忠雅」の号を許され、歌舞伎座、御園座、国立劇場等の絵看板を描いた。1949年11月に鳥居家から「鳥居」の名の使用を許され「鳥居忠雅」を名乗った。鳥居派伝統の筆法を生かした伝統木版画（多色摺）『芝居絵木版画 隈取十八番』（版元・渡辺木版画舗）があり、1941年4月から頒布を開始し、初回2図「梅王の筋隈」、「朝顔仙平隈」で、以後毎月1図宛配布され「平九郎鬼女の隈」、「朝比奈猿隈」、「公家荒の隈」、「赤塗筋隈」、「景清の忍隈」、「梶原親子隈」、「助六のむきみ隈」、「日の出に鳥隈」、「土蜘蛛の隈」、「和藤内の一本隈」、「二人知盛の隈」、「不動の隈」、「松王二本隈」、「剣先隈」、「蟹隈」、「狐の隈」、「寿三番叟」（番外）の19枚（1図5円）で、1943年2月には上野松坂屋画廊で完結の展覧会が開

催された。また、頒布途中の1941年11月には劇画肉筆17点を展示した「上野忠雅劇画展」（会場・渡辺木版画舗）が開催された。好評を受けて直ぐに『続隈取十八番』が企画されたが戦争で中断した。『歌舞伎隈取図説』（彰国社 1943）、鳥居流の『歌舞伎十八番』（彰国社 1952）等も刊行している。1970（昭和45）年5月13日逝去。【文献】和田辰雄「上野忠雅筆芝居絵版画『隈取十八番』について」（『大和絵研究』1-4 研石社 1942.5）（岩切）

上野利一（うえの・としかず）

大阪の堺で発行された『羊土』（1931～1933）は大判の迫力ある版画誌である。その第2号（1932.12）に《自画像》を発表。「版画の研究は初めてで、先づ第一に平素の書つけの自顔を如何程まで如実に表現し得るかを試みた作品で実にお恥かしい」との言葉を残している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

上野長雄（うえの・ながお） 1904～1974

1904（明治37）年兵庫県神崎郡香寺町中村に生まれる。少年期に一家で神戸に移り、兵庫県立工業学校建築科を卒業。大工見習いなどをしながら、1923年より神戸の中安保（当時、神戸市立第一高等女学校教諭）の主宰する地上社洋画研究所（1922年開所）に学ぶ。1927年頃神戸市役所に入り、戦後の1964年まで勤務。画歴は、1932年の兵庫県美術家聯盟第4回展に水彩画《長田山》が入選。続いて1935年の日本水彩画会第22回展に《仙人掌》が入選。同年兵庫県美術家聯盟の会員となり、この年の第10回展から1938年の第16回展まで、1937年の第13回展を除き、毎回出品（作品の種別は不明）した。この間に版画を始め、1940年の第15回国画会に木版画《皿の静物》が初入選。1942年の第17回展にも《びんの静物》が入選した。戦後は、1949年から春陽会展に、1951年からは日本版画協会展に出品するようになり、1953年に春陽会準会員（1970年退会）と日本版画協会会員に推挙されている。1974（昭和49）年1月26日神戸市で逝去。同年の第42回日本版画協会展に遺作3点が並び、『日本版画協会会報』第20号（1974.4）に二見彰一が追悼文「上野長雄さんのこと」を寄せている。【文献】『郷土の木版画家—上野長雄展』図録（姫路市立美術館 2001）/「兵庫県美術家聯盟展目録」/「日本版画協会展目録」（三木）

上野英夫（うえの・ひでお）

1943（昭和18）年4月の造型版画協会第7回展に木版画《アマリリス》《絵物語「青い鳥」》を出品。【文献】『造型版画協会第七回展覧会出品目録』（1943）（三木）

上野 誠（うえの・まこと） 1909～1980

1909（明治42）年長野県更級郡川中島に生まれる。旧姓は内村。1929年に東京美術学校図画師範科に入学するが、学内の共産主義青年同盟の影響をうけて学内改革運動に加わる。1932年検挙、釈放後美校退学処分を受ける。その後、教育労働者部の印刷物を発送中に再度検挙された。1933年釈放後、東京で綿製品仕上工として働いたのち、京都での店員生活を経て川中島で鉄道工夫などの労働に従事。そのころ木版画の制作を開始し、1935年に川中島で木版画の頒布会を開いた。1936年国画会版画部に初入選し、1944年まで同展に出品を続けた。この年結婚し、上野姓となる。1937年東京市第一日野尋常小学

校代用教員となる。またこの年出会った中国人留学生劉峴の勧めで魯迅編集のケーテ・コルヴィッツ版画集を購入、決定的な影響を受けた。1941年鹿児島県指宿中学校教諭となる。1944年岐阜県各務原川崎航空機青年学校の製図教師となる。1945年川中島に帰郷したのち、新潟県南魚沼郡六日町に転居し七洋工芸社に勤める。農民や労働者をモチーフに木版画を制作。1946年日本共産党に入党する。1948年日本美術会会員となる。1949年日本版画運動協会が創設され、会員となる。1950年代初めには、住んでいる地名に由来すると思われるの魚沼六郎の名で木版画を発表した。1952年東京の谷中に転居する。美術懇話会結成に参加。1954年原水爆全面禁止を訴えている被爆者に会い衝撃を受けた。1955年版画懇話会結成に参加。1958年日本版画協会会員となる。1961年「原爆の長崎」連作制作に着手。1963年全ソ連邦美術家同盟の招待によりソ連を旅行し、モスクワで個展開催。以後、しばしば社会主義国で個展を開催した。1980(昭和55)年4月13日逝去。【文献】『上野誠全版画集』(形象社1981) / 『日本の版画 1941—1950・「日本の版画」とは何か』図録(千葉市美術館 2008)(滝沢)

上野碌郎(うえの・ろくろう)

1938年に東京の吉祥寺で発行された版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に『工場夕暮(砂町)』を発表。武井武雄が1934年に全国の芸術家に呼びかけて版画の年賀状交換会として始めた榛の会に第3回の時点で会員となるが、以後参加せず、第9回に復帰。第10・11回と連続参加するものの、第11回(1945)には自身の賀状を出さなかったため、その後は参加できなくなった。1943年当時、日本版画奉公会会員。東京市外吉祥寺2077に在住。【文献】『エッチング』123/市道和豊『奇跡の成立 榛の会昭和21年』(室町書房 2008)(加治)

上原古年(うえはら・こねん) 1877～1940

1877(明治10)年12月15日(16日説あり)東京府浅草区福井町(現台東区浅草橋)に生まれる。本名、千之助。別号政明。1893年梶田半古に学び、のち松本楓湖に師事する。1896年以降、日本絵画協会絵画共進会、日本美術院との連合絵画共進会で活躍、岡倉天心の招きで日本美術院に5年間奉職する。1905年頃(明治末期)にアメリカ輸出用小版画を制作。大正期の版画作品は小林文七(1923年歿)を版元に出版したが、明治期作品も輸出を手がけていた小林の下で制作された可能性が高い。これらは版元の意向を受け、外国で好まれた歌川広重的作風の風景画として制作された。1928年小原祥邨に紹介された版元渡辺庄三郎(渡辺版画店)と繊細で情緒的作風の新版画大判『道頓堀』『残燈』を制作、三切判も出版された。1940(昭和15)年5月24日東京にて逝去。【文献】渡辺庄三郎『木版画目録』(渡辺版画店 1935.4)(清水)

上原政一(うえはら・まさかず)

1942(昭和17)年3月の第17回国画会展に『春を告ぐ』を出品。出品時の住所は東京市大森区上池上町47岡田吉松方。なお、1938年に東京美術学校工芸科図案部予科に入学し、1942年9月に同校を繰上げ卒業した「上原政一」と同一人であるならば、1972年当時は大阪府豊中市桜塚に住み、関西女子学園短期大学に勤務していたようである。【文献】『第十七回国画会展覧会目録』(1943) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部

東京芸術大学大学院美術研究科』(同窓会名簿編集委員会1972)(三木)

上原喜直男(うえはら・よしな男)

長野県須坂の小林朝治は1933年8月に平塚運一を講師として招き、同地での第1回版画講習会を開催。その出席者を母体として信濃創作版画研究会が生まれ、版画誌『樸』(1933～1937)が発行された。その第1輯(1933.8)に『水辺』、第2輯(1934)に『賀状』を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「樸」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

上村松園(うえむら・しょうえん) 1875～1949

1875(明治8)年4月23日京都市下京区四条通御幸町西入ル奈良物町28番戸に生まれる。父太兵衛・母仲子の次女。本名津祢(つね)。幼少より画才を認められ、1887年京都府画学校入学。重ねて鈴木松年画塾に通う。さらに1893年からは幸野煤嶺に師事、のち竹内栖鳳に師事。1888年後素如雲社展で『美婦人図』初入選。1890年に第3回国絵画共進会で『四季美人図』一等褒状。1895年には第4回国絵画博覧会で『清少納言裏簾図』二等褒状を受ける。1907年文展開設以降は官展を舞台に活動。明治・大正・昭和の女流画家の筆頭に上がり「美人画の松園」として知られる。1934年第5回帝展『母子』、1936年文展招待展『序之舞』が代表作とされる。1941年、帝国芸術院会員。1948年文化勲章受章。1949(昭和24)年8月27日肺がんで逝去。戒名は「寿慶院釈尼松園」。長男新太郎の上村松篁、孫の淳之共に三代にわたる日本画家。版画としては、代表的肉筆画を木版画複製にした『焰』やシリーズ名は不明だが『里げしき』(1921)、その他に1913(芸艸堂のホームページでは1909)年芸艸堂から出版された『松園美人画譜』(全12図)が木版画集でもある。(なお同画譜について、1903年五車楼書店が初刊で、その後芸艸堂より出版されたと考えられるが、五車楼版については未確認)。【文献】『大丸創業280年記念画業三代の精華—上村松園・松篁・淳之展』図録(毎日新聞社大阪本社文化事業部編 1996) / 浜口俊裕『松園美人画譜』(大東文化大学電子ギャラリー) / 『山田書店新収目録』56(2003秋)(岩切)

上村松篁(うえむら・しょうこう) 1902～2001

1902(明治35)年11月4日京都に生まれる。母は日本画家・上村松園。1921年京都市立絵画専門学校本科に入学し、西山翠嶂に師事。松篁と号す。同年第3回帝展に『閑庭迎秋』が初入選し、以降帝展、西山翠嶂の塾展(青甲社展)に出品する。1930年同校研究科を卒業し、京都市立美術工芸学校講師、1936年京都市立絵画専門学校助教授となる。戦後1948年日展を離れ、日本画の革新を目指して山本丘人、奥村厚一らと「創造美術」を結成する。1949年京都市立美術専門学校教授となる。1967年日本芸術院賞を受賞。1984年文化勲章受章。2001(平成13)年3月11日逝去。版画は宇田荻邨、小野竹喬、土田麦僊、徳岡神泉、山口華楊などが参加した『新進花鳥画集』(マリア書房 1931～33)に木版画『紅梅と小鳥』、『草花』の2図制作。【文献】『誕生100年 上村松篁展』図録(京都市立美術館 2002) / 『日本美術年鑑』2002年版 / 『山田書店新収目録』81(2008春)(樋口)

植本十一（うえもと・じゅういち） 1912～1976

1912（大正元）年香川県に生まれる。画号は浩嗣。エスペラント語を学ぶうちに、その会報が謄写版印刷であったことから1932年に謄写印刷の世界に入り、1934年に開業、昭和堂技術部にも参加した。楽譜印刷の技術にすぐれ、美術印刷の名手としても知られた。戦後、児童文化の荒廃を憂い、こどものための良質な絵本を作ろうと童話絵本『花咲く言葉』を1950年に刊行。この絵本はコウウ夫人の童話に、シベリアから復員したばかりの洋画家、水島泷の原画を植本が草間京平とともに製版した、謄写版の歴史に残る、文字も挿絵も謄写印刷で仕上げられた美しい本である。1951年帝都孔版技術学院を開設、後進の指導にも努め、社団法人日本グラフィックサービス工業会の前身にあたる日本軽印刷業組合連合会で1962年から一年間会長を務めた。趣味の鉱物収集から鉱物学者・益富寿一郎博士との交流が始まり、1964年静岡県富士宮市に居を移し、1971年に開設された奇石博物館（現・一般財団法人地球の石科学財団奇石博物館）初代館長をつとめる。1976（昭和51）年逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』（日本謄写美術協会 1947）/『昭和堂月報』28・29（1937）/須永襄編『昭和堂月報の時代』（大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000）/『奇石』（奇石博物館 2004）（植野）

魚沼六郎（うおぬま・ろくろう）→上野誠（うえの・まこと）

宇賀神武男（うがじん・たけお） 1902～1966

1902（明治35）年栃木県河内郡姿川村（現・宇都宮市）で生まれる。1918年に姿川尋常高等小学校を卒業し、同年栃木師範学校に入学。1922年に卒業後、姿川尋常高等小学校に勤務するが、翌年には姿川第二尋常小学校へ赴任。その頃、川上澄生らが発行していた版画誌『村の版画』（1925～1934）の同人たちと知り合い、第3号〔1925.4〕に『田舎道』を出品。それ以後、第4号（1925.7）に『火の見』、第5号（1925.9）に『風景』、第6号（1925.11）に『鳥打』と裏表紙絵、第8号（1929.1）の『橋』まで作品の発表を続ける。その間、国本尋常小学校をへて姿川第一尋常小学校へ転任する。その後は版画制作から遠ざかった。1958年豊郷中央小学校校長を最後に定年退職。1966（昭和41）年逝去。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）/『創作版画誌の系譜』（加治）

右京音松（うきょう・おとまつ）

和歌山県新宮市出身か。1932（昭和7）年の日本版画協会第2回展に木版画『御燈祭』が入選。1933年には和歌山県の紀南地方の作家が結集した「全熊野美術家協会」の結成に参加し、版画部に属した。同会は、戦前は1942年頃まで新宮市で展覧会を開催したが、現在確認できる同展の目録は1934年に開催した第2回展のみであり、木版画『万年草』『花の静物』『鱒とランプ』『鬼ヶ城風景』の4点を出品している。なお、同会は1947年に「熊野美術協会」と改称し、活動を再開。再開時の会員でもあるが、その後の消息は伝わっていない。【文献】『第二回日本版画協会展覧会目録』（1932）/『第二回全熊野美術展目録』（1934）/『和歌山の作家と県内洋画壇展（1912-1945）』図録（和歌山県立近代美術館 1984）/『熊野美術協会 第30回記念特輯号』（1978）（三木）

宇崎純一（うざき・すみかず） 1889～1954

1889（明治22）年4月11日兵庫県加東郡河合村（現・小野市）に宇崎吉兵衛の長男として生まれる。生家は代々醤油製造業や建築請負業を営んでいたが不振となり、5歳の時に大阪に移り、居酒屋、玩具屋、いろいろ屋などを経営する。1902年府立市岡中学卒業。1909年親友の田村華陽が主宰する雑誌『白楊』（エミヤ書肆）が創刊され、表紙やカットを手掛ける。1911年3月『スミカズ画集 妹の巻』（エミヤ書房）を初めて出版。同年6月『絵画の手本』、1912年『続絵画の手本』、1914年『新絵画の手本』の3冊はエミヤ書房と家村文齋堂から出版され、刷版によっては、本文や口絵が木版や石版で摺（刷）られた。また明治末から大正中期にかけて400枚を超える石版刷のスミカズ絵葉書を制作。5歳年上の竹久夢二、同じ年の宮崎与平とともに「コマ絵画家」として人気を博し、その画風から「大阪の夢二」と呼ばれた。昭和に入って、梅谷紫翠、芳本倉太郎、画箋堂、日本絵葉書会などから木版多色摺絵葉書を出版するほか、大阪や神戸、南海鉄道などの観光用、商業用絵葉書の原画なども描いた。一方、1920年に自宅一階に波屋書房を開業。経営は11歳離れた弟祥二に任せ、自身は画業に専念するが、波屋書房には文人・画家たちが集い、1925年文芸誌『辻馬車』の発行元となって1927年10月終刊まで32冊刊行、小出楯重が表紙絵を描いた（一時期純一も描く）。戦後も絵本や表紙絵、挿絵などを描くが、次第に忘れ去られた。1954（昭和29）年5月19日大阪で逝去。1984年頃より展覧会などが開かれ、「大正ロマンの作家」として再び注目される。【文献】『大阪春秋』148（新風書房 2012.10）（樋口）

宇佐美一郎（うさみ・いちろう）

1929（昭和4）年秋、静岡では版画好きの仲間小川龍彦・中村岳・栗山茂らが集って「童土社」を結成し、「童土社同人創作版画展覧会」を開催する。宇佐美はその創立同人であり、当時は静岡郵便局に勤務し、中村はその同僚であった。1929年10月に開催された第1回展（田中屋襪衣店 1929.10.5～7）に木版画『日暮れ』『浴後』『卓上』の3点を、翌年の第2回展（同 1930.10.11～13）に『たもと』『憩』『朝』『酒倉』『鐘楼』『少女』の6点を出品する。また中村が主宰した『有加利樹 再刊』第1輯（1929.12）に『幸福猫』と詩を、再加2輯（1930.3）に『朝』と詩を、第3輯（1930.7）には『風景』を発表。さらに栗山が主宰した『艸笛』第3号（1930.8）に『朝顔』を発表する。その後、童土社は版画と文芸の雑誌『ゆうかり』（1931～1935）を創刊。その第1号（1931.1）に『鐘楼』『酒倉』、第2号（1931.3）に『メソヂスト教会』、第3号（1931.5）に詩のみを発表するが、その後は退会し、版画制作から遠ざかる。1967年頃は沼津市に住み、沼津郵便局長を務めている。宇佐美市郎の表記もあり。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房 1967）/『静岡の創作版画』（静岡県立美術館 1991）/『創作版画誌の系譜』（加治）

牛尾貞男（うしあま・さだお）

長野県師範学校本科第二部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号2598年版（1938）に『風景』を発表する。【文献】『樹氷』1（加治）

牛越好成（うしごえ・よしなり）

1937年に西田武雄を講師に招いて開かれたエッチング講習会（長野県松本市松本商業学校 10月30・31日）

に参加。西田の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第61号(1937.11)に作品が掲載される。当時は長野県伊那高等女学校に勤務。【文献】『エッチング』61 (加治)

牛島 健(うしじま・けん)→牛島憲之(うしじま・のりゆき)

牛島憲之(うしじま・のりゆき) 1900～1997

1900年(明治33)年8月29日熊本市に生まれる。東京美術学校で岡田三郎助教室に学び1927年卒業、同期生と上社会を結成する。またこの年、第8回帝展に初入選する。1930年、2年余り小林萬吾の同舟舎洋画研究所に通い石膏デッサンを研究する。1935年東光会第4回展でK氏奨励賞受賞。1936年主線協会(まもなく主線美術協会となる)を結成。1942年創元会会員となる。1946年第2回日展で《炎昼》が特選となる。1949年官展をはなれて立軌会を結成し、以後同展に作品を発表した。戦後は日本国際美術展や現代日本美術展などに出品。また東京藝術大学で後進を指導した。1978年京都国立近代美術館で個展開催。1983年文化勲章受章。1997(平成9)年9月16日逝去。翌1998年、遺作110点が府中市美術館に寄贈された。版画の制作は少ないが、『一木集』第2輯(1946.5)所収の木版画《雲》がある。この版画集への牛島の参加について、関野準一郎は次のように記している。「油絵画家の牛島憲之の珍しい自刻自摺の木版画が牛島健の名で、この集にある。油絵名を使うのにこだわって「健」としたのであろう。勿論、恩地門でない。若山八十氏は牛島のファンで作品も所蔵し、影響も受けていたので、その熱心な勧誘で二輯に出品した。今では珍品になっている」(『一木会展図録』リッカー美術館)。若山は一木会参加の孔版画家で、自身が編集発行する版画誌『孔版』の第6号(1943.2)に、牛島のコメントを掲載している。また若山をはじめ、畦地梅太郎や斎藤清が、牛島の油彩画に共鳴する様式の版画を制作している。その他、版画作品に《瓦焼》(1945)、《自画像》(1946)などの自刻の木版画、加藤版画研究所摺り、発行の版画輯などがある。【文献】『牛島憲之と昭和前期の絵画展』図録(府中市美術館 2004)/『加藤版画研究所四十年作品の歩み〔パンフレット〕』(1975.6)(滝沢)

牛田雞村(うしだ・けいそん) 1890～1976

1890(明治23)年8月14日横浜に生まれる。本名、治(はる)。付近に外国人が多く、早くから英語に親しむ。1906年東京中央商業学校卒業後、横浜の外資系石油会社に勤めるが、1907年退職。画家を志し、松本楓湖の安雅堂画塾で学ぶ。ここで今村紫紅や速水御舟、小茂田青樹らと出会う。巽画会、紅児会に出品。1913年第7回文展に出品した《町三趣》で横山大観に認められる。この頃から美術の収集家・パトロンとして知られる原三溪の援助を受ける。1914年日本美術院に院友として迎えらる。同年今村紫紅らと赤曜会を結成。1926年第13回院展に代表作《蟹江二題》を発表。日本画制作のほかに、俳句を能くし、大正の初め頃から友人の前田普羅を通じて高浜虚子を知り、虚子の『ホトトギス』、蛇笏の『雲母』などと関わる。また前田普羅の蔵書票ほか木版蔵書票の制作なども手がける。戦後は1946年第31回院展を最後に画壇を離れ、舞台美術の仕事や俳誌の表紙絵などを描く。1976(昭和51)年10月21日横浜で逝去。【文献】『第5回蔵書票作品集』(日本蔵票会 1928)/『磯ヶ谷 紫

江貼書符』(1953)/『反骨の画家 牛田雞村』(NHK出版 1992)(樋口)

宇治山哲平(うじやま・てっぺい) 1910～1986

1910(明治43)年9月3日大分県日田市豆田町52番地に生まれる。本名は哲夫。1923年大分県立日田中学校に入学。在学中、美術に興味を覚え、版画を始める。1928年同校を卒業し、翌年日田郡立工芸学校描金科に入学。漆芸蒔絵の技術を学び、1930年同校を卒業。日田漆器株式会社に入社し、デザインを担当する傍ら、本格的に版画制作に打ち込む。1931年の第3回第一美術協会展に木版画《田舎の停車場》が初入選。翌1932年の第4回展にも《マンドリンを弾く男》が入選。また、同年の第2回日本版画協会展にも《水郷の夏》が初入選し、1937年の第6回展まで連続出品した。この1932年から1937・38年にかけての宇治山の版画制作は旺盛で、1932年から自作版画集『郷土』(1932～1934 33景)の刊行を始め、翌1933年には伊東健乃典らと日田で創作版画誌『朴ノ木』(1933.4～? 4冊か)を創刊した。また、この1933年には小野忠重らの新版画集団(1932～1936)に参加。同年の第3回展から第6回展(1936)まで出品し、機関誌『新版画』の第11・13・15・17・18号(1933.12～1935.12)にも作品を発表した。その間、1934年に武藤完一の指導により大分県図画教員検定試験に合格。日田漆器株式会社を辞し、福岡市内の高等小学校に勤めるようになり、1935年の第10回国画会展にも初入選している。1937年には教員を辞し、福岡日日新聞社に入社。同年の第3回新興美術家協会展に出品し、新会友に推挙され、翌1938年の第4回展で新興美術家協会賞を受賞した。また、1938年の第2回造型版画協会展にも出品。会員となるも、出品は翌1939年の第3回展までであった。その後、1939年頃より油絵に転じ、国画会展を軸に作品を発表。1943年に会友、1944年に会員となっている。戦後は、大分県日田工芸所(後、大分県工芸指導所と改組)に勤め、国画会展の他、日本国際美術展、現代日本美術展などに独自の抽象画を発表し、1971年第12回毎日美術賞を受賞。また、大分県立芸術短期大学教授(1961～1971)、同短期大学学長(1971～1973)、別府大学教授(1981～1985)なども務めた。1986(昭和61)年6月18日別府市で逝去。【文献】『宇治山哲平展一絵に遊び、絵に憩う』図録(東京都庭園美術館 2006)/加治幸子編「新版画集団展目録」『版ニュース第4号別冊』(輝開 1998.7)/桑原規子「新興美術協会の成立と消滅 一九三五—一九四三—玉村善之助、恩地孝四郎、小野忠重、伊藤熹朔の周辺—」『聖徳大学言語文化研究所 論集』14(2007)/『創作版画誌の系譜』(三木)

牛山正雄(うしやま・まさお)

長野県諏訪郡玉川に生まれる。長野県師範学校本科第二部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号2598年版(1938)に《憩の一時》を発表する。1939年同校を卒業。1950年当時は東京の講談社に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

白井達郎(うすい・たつお)

長野県東筑摩郡広丘に生まれる。長野県師範学校本科第一部5年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第

2号2600年版(1940)に《シケン木》を発表する。1940年同校を卒業。1950年当時は東筑摩郡宗賀小学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

白井俊之(うすい・としゆき)

1933年栃木県宇都宮の築瀬瀨常小学校に赴任するが、その同僚たちの中に川上澄生らが発行していた版画誌『村の版画』(1925~1934)の同人がいたのをきっかけに版画制作をはじめ、同誌第19号(1934.2)に《スキー》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

白井文平(うすい・ぶんぺい) 1898~1994

1898(明治31)年長野県南安曇野郡に養蚕農家の三男として生まれる。商社用の美術品を買い付ける兄とともに東南アジア、ロンドンに渡り、1921年帰国途中に立ち寄ったニューヨークが気に入りそのまま滞在。家具デザインの仕事の傍ら、油絵を自己流で描き始め、独立美術協会展などに出品。後に国吉康雄に師事し、サロン・オブ・アメリカや各種グループ展などに出品する。また額縁のセンスが評価され、米国の額縁作りの評判を得る。国吉の額縁のほとんどを手がけ、国吉作品のコレクター。戦後は日本の古美術のコレクター、刀剣鑑定家としても知られる。版画は1930年頃に制作したと思われる《赤ちゃん》(リノカット)がある。【文献】『太平洋を越えた日本人の画家たち』図録(広島県立美術館 1987) / 『アメリカに生きた日系人画家たち』図録(東京都庭園美術館 1995) / 『白井文平展』図録(フジテレビギャラリー 1993) (樋口)

宇田荻邨(うだ・てきそん) 1896~1980

1896(明治29)年6月30日三重県松坂市に生まれる。本名善次郎。1913年菊池芳文に師事。荻村(のちに荻邨)と号す。1917年京都市立絵画専門学校卒業。1918年芳文没後は菊池契月に師事。1919年第1回帝展に《夜の力》が初入選、1925年第6回帝展に《山村》が特選、1926年第7回帝展に《淀の水車》が再び特選となり、帝国美術院賞を受賞し脚光を浴びる。1936年京都市立絵画専門学校教授。母校の絵専で長く後進の指導にあたる。1950年日展参事。1961年日本芸術院会員。1980(昭和55)年1月28日逝去。版画は上村松篁、小野竹喬、土田麦僊、徳岡神泉、山口華楊などが参加した『新進花鳥画集』(マリア書房 1931~1933)に木版画《[烏瓜]》《[水鳥]》の2図制作。【文献】『画業60年記念「宇田荻邨展」—京の四季—』図録(サンケイ新聞社 1977) / 『山田書店新収目録』81(2008春) (樋口)

歌川国松(うたがわ・くにまつ) 1855~1944

1855(安政2)年11月生まれる。はじめ、父親である国鶴(二代豊国門人)に学ぶ。兄(次男)は勘之助(二代国鶴)で、三男が国松である。本名和田国次郎。のちに二代豊国を師とし、さらに三代豊国門下に列して「一龍齋」を号す。左筆であった。父親と共に大阪暮らしがあり、主に京阪地方の新聞雑誌の挿絵で活躍。上京して京橋尾張町一丁目に居たこともあったが、再び大阪に移る。明治期の錦絵、新聞・雑誌・単行本の小説挿絵、木版口絵も手がけ、千社札の絵師としても活躍。『此花』第5枝(雅俗文庫 1910.5)「現今浮世絵師」には、「師門

二世歌川豊国 小林永濯 豊原国周/俗称 歌川國松/年齢 五十六(安政二年生)/生地 江戸下谷/現住 大阪市北区老松町二丁目七番地」とある。大正期には役者絵、千社札の絵も描いた。長寿で1944(昭和19)年、90歳で逝去。【文献】『原色浮世絵大百科事典』第2巻(大修館 1982) / 由良哲次編『総校日本浮世絵類考』(画文堂 1979) (岩切)

歌川国峰(うたがわ・くにみね) 1861~1943

1861(文久元)年浮世絵師歌川(二代)国久(角田久太郎)の次男に生まれる。本名は銀次郎。1885年の坪内逍遙『当世書生気質』、三遊亭円朝『怪談牡丹灯笼』の口絵、挿絵が特によく知られる。祖父が初代国貞(三代豊国)で、母はその娘「お勝」。兄は豊宣。その歌川派系統の後継ぎであったが、1892年、その居宅を葛餅の船橋屋に譲って大阪に移住。大阪毎日新聞、その他の新聞、雑誌の挿絵を描く。1897年1月に祖父豊国の三十三回忌を営む。晩年は鎌倉在住。1943(昭和18)年2月15日逝去。法名は「豊山院彭壽國峯居士」。【文献】『原色浮世絵大百科事典』第2巻(大修館 1982) / 由良哲次編『総校日本浮世絵類考』(画文堂 1979) / 中里民平『国貞研究其の六、光明寺に於ける豊国の墓』(私家版 1949.8) (岩切)

宇田川栄三郎(うだがわ・えいざぶろう)

1931(昭和6)年9月の日本版画協会第1回展にエッチング《表慶館遠望》《樹下小径》を出品。その後の活動は不明であるが、1943年5月に「日本版画奉公会」の会員となり(『エッチング』123)、同年12月に同会より日本海運報国団へ贈られた版画目録には《都会風景》(エッチング)の作品名が記されている(『エッチング』132)。当時の住所は東京荒川区日暮里町8ノ99。【文献】『日本版画協会第一回展覧会出品目録』(1931) / 『エッチング』123・132 (三木)

宇田川勇三(うだがわ・ゆうぞう) 1893~1982

木口木版彫師。芝築地三郎「私が知っている限りの日本の西洋木版画の歴史」(『町田市立国際版画美術館紀要』第4号 2000.3)に所載の「芝築地派名簿」によると、師匠は芝築地玉舟(孝次郎・1864~1941)。号は小舟、生年が1893(明治26)年、永眠が1982(昭和57)年2月、出身・東京とある。(岩切)

歌川芳宗(二代)(うたがわ・よしむね) 1863~1941

1863(文久3)年2月5日生まれる。本名新井周次郎。初代芳宗(1817~80)の末子。13歳で芳年門人となり、西南戦争錦絵を手掛ける。初名は年雪。1882年以降に「(二代)芳宗」を名乗る。号は松齋、一松齋。芝増上寺内に住み、のち京橋南金六町三に居住。『撰雪六々談』(1892~93)の大判錦絵24枚が代表作。明治錦絵の他に新聞、雑誌の挿絵などで活動。1941(昭和16)年逝去。【文献】『近代日本版画大系』第1巻(毎日新聞社 1975) / 『原色浮世絵大百科事典』第2巻(大修館 1982) (岩切)

内田郁雄(うちだ・いくお)

1932年6月版画の大衆化を掲げて柴秀夫、小野忠重、武藤六郎ら22名は「新版画集団」を立ち上げる。内田は同年9月に加入(『新版画』4 1932.9)し、その機関誌『新版画』第5号(1932.10)に《無題》《ガード》《静夜》の3点を、第6号(1932.11)に《富士と本栖湖》、第7

号(1933.1)に《喜劇役者》を発表する。内田郁夫の表記もあり。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

内田巖(うちだ・いわお) 1900～1953

1900(明治33)年2月15日内田魯庵の長男として東京に生まれる。東京美術学校西洋画科で藤島武二教室に学ぶ。1923年関東大震災のさなかに出会った吉居静(1927年に結婚)に、数年に亘って100枚をこえる木版画と愛の詩の葉書を送り続けた。1925年三科第2回展(公募展)に《オドリ》を出品する。しかし前田寛治の作品を目にして感銘、絵画観を一変させた。1926年卒業、この年第7回帝展に初入選する。1927年、1930年協会第2回展に出品。1929年光風会第16回展に出品し、光風賞受賞。1930年渡欧しパリのアカデミー・ランソンに学ぶ。またカミーユ・コロアの絵画を研究した。1932年帰国。1933年光風会会員となるが、帝展改組に際して同会会員を辞し、官展からも退いた。1934年3月版画荘を営む平井博の案内で、猪熊弦一郎、脇田和らとともにワルワラ・ブブノワのアトリエを訪ね、ジंक版の石版画を試作した。1936年猪熊、小磯良平らと新制作派協会を創立。1944年岡山県州部町に疎開。1946年岡山県内に疎開中の小野忠重や段塚魚郎ら版画家らと交流する。また東京に戻り、日本美術会創立に参加し主要メンバーとなった。1948年日本共産党に入党。藤田嗣治の戦争責任を糾弾するなど、画壇で政治的な活動を展開。戦後は、新制作派協会(1951年に新制作協会となる)や日本アンデパンダン展などに出品した。『物射る目』(出命館出版部 1941)、『絵画の美(油絵篇)』(富山房 1943)、『人間画家』(寶雲社 1947)などの著作がある。1953(昭和28)年7月17日逝去。【文献】『没後50年 内田巖展—猪熊弦一郎・小磯良平とともに展』図録(新見美術館ほか 2004) / 『内田巖青春譜展』(南天子画廊 1965.8.23～8.31)(滝沢)

内田三郎(うちだ・さぶろう) 1901～没年不詳

1901(明治34)年に生まれる。別名は庄三郎(1953年頃に改名か)。1920年京都市立美術工芸学校図案科卒、徳力富吉郎に師事。1929年京都創作版画会第1回展に《顔》《鉄砲屋》、1933年京都創作版画会第2回展に《早春の円山》《瀬田川鉄橋》を出品。1930年頃刊行の『新京都五十景版画会』(創作版画倶楽部)に徳力富吉郎、大月文一、高橋太郎、亀井藤兵衛らとともに参加。戦後は1951年発足の「京都版画協会」で事務局を務め、自宅(京都市左京区岡崎徳成町21)を協会事務局とする(内田庄三郎名)。同年12月京都版画協会第1回展では内田三郎の名前で《風景》《観戦》《早春の円山》《雪の疎水》の4点を出品。また京都在住の11名の版画家たちによる『版画集 京都名所』(刊年不明)では、内田庄三郎の名前で《大原三千院》を制作。1968年第1回英国版画ビエンナーレ展出品(未確認)。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要 第12号』(京都府立総合資料館 1984) / 『京都市立美術工芸学校同窓会名簿』(1971) / 『版画家名覧』(山田書店版画部 1985)(樋口)

内田静馬(うちだ・しずま) 1906～2000

1906(明治39)年4月1日埼玉県北足立郡川田谷村に生まれる。1924年東京高等工芸学校木材工芸科に入学し、主に家具製作の技術を学ぶ。1927年同校を卒業。版画はこの頃から始めたようで、「〔昭和〕二年十二月作」

と彫られた最初期の木版画《裸婦》が残る。1928年の第8回日本創作版画協会展に《あづさ川の源》、第6回春陽会展に《葱人参の図》《朱面絵馬》が初入選。翌1929年も第9回日本創作版画展と第7回春陽会展に出品。春陽会研究所にも学んだ。1930年新潟県立高田商業高校の教諭となり、高田に移る。1931年の第9回春陽会展と日本版画協会第1回展に出品。翌1932年の第10回春陽会展にも出品したが、日本版画協会の方は会員に推挙され、以後、同年の第2回展から1941年の第10回展まで連続して出品。その間、1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展」(パリ装飾美術館 主催:日本版画協会)に《海水浴場》《厨房静物》など4点を出品し、《海水浴場》がパリ国立図書館の買い上げとなった。また、1938年に始まる協会会員による『新日本百景版画』事業に参加し、翌年《雪の高田市》を頒布している。1939年に下関市立下関商工学校へ異動。1942年の第11回展以降は出品が無く、1945年に川田谷村に戻り、終戦を迎えている。戦後は埼玉県庁や家具会社に勤めながら版画界への復帰を図ったが、公募展への出品は遅く、1960年になって棟方志功、前川千帆らが結成した「日本版画会」の第1回展に出品。翌年には会員に推挙され、1999年の第40回記念展まで出品した。また、1966年からは新世紀美術協会展にも出品するようになり、1968年には準会員となり、1977年まで出品した。版画に関する著書に『木版画の制作技法』(理工学社 1972)、『版画技法の応用』(松岡雄三との共著 理工学社 1973)がある。2000(平成12)年4月29日逝去。【文献】折井貴恵「木版画家・内田静馬—その生涯と作品」『年譜(未定稿)』『木版画家・内田静馬 素朴美へのまなざし』図録(川崎市立美術館 2011)(三木)

内田庄三郎(うちだ・しょうざぶろう) → 内田三郎(うちだ・さぶろう)

内田進久(うちだ・しんきゅう) 1901～1958

1901(明治34)年4月13日埼玉県秩父郡毛田蒔村に生まれる。本名は利太郎。1926年東京美術学校図案部を卒業。栃木県師範学校教諭となり、宇都宮に住む。その後、1943年官立栃木師範学校教授、1950年宇都宮大学学芸学部教授、1958年宇都宮大学学芸学部附属中学校長などを歴任。その間、1930年に栃木県美術協会、1950年に栃木県図画工作研究会を組織するなど、美術教育者として栃木県の美術教育の発展に尽くしたが、その一方で、銅版画家として数多くの足跡を残している。エッチングを始めた経緯は不明であるが、1934年の『エッチング』第21号(1934.7)には、日本エッチング研究所のエッチングプレス機の所有者紹介欄に初めて「栃木県立師範学校 内田進久」の名前が登場するので、この頃までには制作を始めていたものと推定される。1935年の第12回白日会展に《教会風景》が入選。1937年の第7回下野美術展に《石切場》を出品し、入賞。同年秋の第1回文部省美術展(新文展)には《風景》を出品し、初入選を果たしている。その後、1939年の第8回日本版画協会展に《牛》、翌年の第9回展に《大谷風景》《明智平風景》を出品。1944年には会友に推挙されているが、出品は無かった。一方、1940年には西田武雄を中心に結成された「日本エッチング作家協会」に参加。同年の第1回展に《風景》、1941年の第2回展に《石切場》《独立樹》、1942年の第3回展に《石切山》を出品。また、1941年の第28回光風会展にも《大谷風景B》を出品している。その

後、戦争による中断があるも、戦後は1946年の文部省主催第1回日本美術展に《船着場》を出品したのを皮切りに、1947年の第33回光風会展、同年の第15回日本版画協会に出品を再開。これらの展覧会を軸に活発な活動を続け、1948年に日本版画協会会員となり、1953年には関野準一郎、駒井哲郎らとともに「日本銅版画家協会」の結成に参加している。1958（昭和33）年8月20日宇都宮市で逝去。宇都宮大学学芸学部附属中学校長に在職のままでの急逝であった。【文献】小勝禮子「内田進久の銅版画—作品総目録」『栃木県立美術館紀要』12（1990）/『エッチング』（三木）

内田達次（うちだ・たつじ） 1914～1971

1914（大正3）年1月7日東京日本橋に生まれる。1926年に静岡市立城内尋常小学校、1931年静岡県立中学校を卒業する。静岡市東鷹匠町の自宅前には栗山茂の家があり、夢二や虹児に憧れを抱き、仲間と栗山家に集まっては美術や文学、詩や短歌・俳句の話などしていた。1930年に栗山が中学卒業記念として創刊した版画誌『艸笛』第1号（1930.3）に《コスモス》、第3号（1930.8）に《お人形》《少女》と詩「麦畑 他」を発表。静岡ではそれ以前から小川龍彦や中村岳が版画誌を発行していて、そこに栗山が意気投合し、童土社を設立。内田も参加し、第2回童土社絵画展覧会（田中屋襦衣店 1930.10.11～13）には《うるしの木》など15点を、第3回展（田中屋画廊 1931.6.7～9）には《れんげ》など草花を主題に10点、第5回展（静岡市松坂屋画廊 1933.8.19～22）には《フレームのある風景》など4点を出品。その間、童土社は版画と文芸の同人誌『ゆうかり』（1931～1935）を創刊する。その第1号（1931.1）には《風景》を、そして第2～5/6合併号・10・12・14～18号（1934.2）には木版画や感想文などを発表する。その頃、東京で版画誌を発行していた料治熊太の『白と黒』第14～17・19・23・26～29号（1930～1932）や『版藝術』第9・[21]号（1932～1933）にも作品を寄せている。特に『白と黒』第16・17号では扉絵も担当した。そのほか静岡で発行された版画誌『版画座』第1～2号（1932.11～12）や版画誌『かけた壺』第17号（1933.12）にも作品を発表しており、10代の内田が版画や詩の創作に熱中していたことが窺われる。その後、1934年に東京へ転居し、仲間達から離れたためか、医者になるための勉強からか、版画制作からは遠のいていく（『かけた壺』21・22 1934）。その年に東京慈恵会医科大学予科に入学。医者となった後は鎌倉に在住。軍医中尉で終戦を迎え、戦後は国立予防衛生研究所に入所。1955年に医学博士を授与される。この頃、短歌に親しみ青樫社に入会し、『青樫』誌に作品を発表。1971（昭和46）年6月逝去。没後には恩師の撰により『凍湖 内田達次遺歌集』が上梓される。【文献】『凍湖 内田達次遺歌集』（青樫社 1975）/『静岡の創作版画』図録（静岡県立美術館 1991）/『創作版画誌の系譜』（加治）

内村 誠（うちむら・まこと）

1936（昭和11）年4月の第11回国画会展に木版画《炬燵》を出品。出品時の住所は長野県更級郡川中島村116。【文献】『第十一回国画会展覧会目録』（1936）（三木）

内山一郎（うちやま・いちろう）

朝鮮釜山の清永完治によって発行された版画誌『朱美

之集』（1940～1942）の第2冊（1940.8）に《ゼラニウム》を発表。当時、愛知県豊橋中学校に勤務（『朱美通信』2〔1940.8〕）。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

内山嘉吉（うちやま・かきつ） 1900～1984

1900（明治33）年12月9日岡山県後月郡芳井村に生まれる。実兄に中国上海で内山書店主人として魯迅との親交の深い内山完造がいる。3歳で香川県丸亀在所の叔父の養子となる。丸亀中学在学中に斎田喬（学校劇運動・自由画教育家）と知り合い、美術教育をはじめとして、学校劇、児童劇などで強い影響を受ける。1921年に上京し、クラウンクレヨン商会（後の王様クレヨン）に勤める。1923年木下小学校（千葉県印旛郡木下町）の代用教員を経て、1927年成城小学校（成城学園小学部）の美術教師となる。同年8月初めて上海に兄完造を訪ね、内山書店を訪問する。1931年に3度目の上海・内山書店への訪問で、完造から魯迅を紹介される。魯迅の依頼と完造夫婦のすすめで、中国青年画学生向けの版画指導講師を引き受ける。上海長春路の日本語学校（長春路360号）で8月17日から22日の6日間、魯迅の通訳のもとで、木版画講習会を開催する。嘉吉は専ら技法について講じる。受講生は魯迅によって選ばれた13名（陳卓坤、陳鉄耕、江豊、黄山定、李岫石、顧鴻干、鄭敬凡、鍾步清、柴以鈞、苗勃然、倪煥之、胡仲明、鄭洛耶）で、その構成は一八芸社社員6名、上海芸術専科学校学生2名、上海美術専科学生2名、白鵝画会会員1名から成る。この木版画講習会は中国新興版画的の起点となる。更に彼ら受講生13名は、中国近代・現代版画形成に欠かせない版画家として中国版画界を索引する。尚、その時の13名の作品は、後に嘉吉の手を通して神奈川県立近代美術館に収蔵される。1933年9月嘉吉は小原国芳（玉川学園創立者）・斎田喬らとともに成城小学校を辞し、和光学園設立に参加。和光学園で美術教育とりわけ児童版画教育に多くの力を注ぐ一方、学校劇、児童劇の指導にも力を入れる。また翌年には生徒たちの版画を魯迅に贈るなど、魯迅との関係を大切にす。1935年中国書籍専門の内山書店を東京祖師谷に開くが、2年後には神田一橋に移転する。嘉吉は児童劇に関する運動・指導に積極的に取り組み、劇作家としても活躍した。1984（昭和59）年12月30日逝去。【文献】『中国木版画展』図録（神奈川県立近代美術館 1975）/内山嘉吉・奈良和夫『魯迅と木刻』（研文出版 1981）/『一九三〇上海 魯迅』図録（町田市国際版画美術館・山梨県立美術館 1994）/『魯迅に贈った和光小学校の版画』（和光学園 2011）（河野）

内川香堂（うちかわ・こうどう）

「東京大正博覧会」（1914）美術館出品図録の内の「西洋画彫塑建築写真彫版」冊子（1914.7 画報社）の中に、「内川香堂《凝視》西洋木版」とある。西洋木版は「木口木版」のこと。青木茂氏によると、「前年（大正2年）の第7回文展へ出品された岡田三郎助の同じ題名の油絵を複製した作品」とする。【文献】青木茂「芝楽地派と峰島尚志」『町田市立国際版画美術館紀要』3（1999）（岩切）

内山秀一（うちやま・しゅういち）

茨城県出身か。川端画学校洋画科、続いて本郷絵画研究所に学び、エッチングは1927年より渡辺光徳に学ぶ。展覧会への版画（エッチング）の出品は、1930年1月の白日会第7回展で《風景》が初入選。翌1931年1月の

第8回展にも《風景》が続けて入選し、同月の新興版画会第1回展にも出品したようである。同年10月には第12回帝展に《東都近郊》が入選し、有志によるエッチングの会（頒布会か）が催されている。翌1932年1月の第7回春台美術展に《坂のある風景》《工房内読書》を出品。2月頃には、日本版画協会会員に推挙されたが、同会への出品はなかったようである。『版画 CLUB』第4年第3号（1932.4）の「新人紹介（8）内山秀一氏」には、春台美術展出品の《工房内読書》の図版、画歴と共に、「風が持て来た、新人中の新人である。／自画像と氏の筆蹟によると初老に近き人とのみ思はれたが、昨年帝展に氏の、エッチング「東都近郊」が入選された時、厳父より洋服を新調されたのが何よりも嬉しかったさうである。さうであらう本年漸く三十歳」と紹介されている。当時の住所は、茨城県鹿島郡大同村。その後の消息としては、『日本版画』第127号（1943.8）の「日本版画奉公会新会員」の名簿に名前がある。【文献】『版画 CLUB』4-3/『日本版画』127（三木）

鶴月左青（うづき・させい）

俳画家。1925年『俳画の描き方』（文明堂書店）出版。木版摺画集『左青俳画』前集・後集（健文社 1940）がある。【文献】『版画堂』目録103（2014.3）（樋口）

宇都宮吉彦（うつのみや・よしひこ）

1931（昭和6）年8月、講師平塚運一で開催された大分師範学校での版画教育講習会に参加し、版画制作を始める。主宰した武藤完一はこの講習会を機に版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を創刊する。その第1号（1931.9）に《万年青》、第2号（1931.11）に《七夕》、第4号（1932.6）に《チューリップ》を発表。一方、この講習会に中津市から参加した宇都宮を含めた同宿の者10人が親睦と技術の向上のため、地元で版画誌『空き巣』（1931～1932）を創刊する。その第1号（1931）に《習作》、第2号（1931.12）に《愚感》を発表。そのほか、『彫りと摺り』の改題誌『九州版画』第2号（1934.1）と青森で発行された『陸奥駒』第16集（1934.12）に《桃太郎の犬（賀状）》を発表する。当時、大分県北海部郡佐志生校に勤務（『彫りと摺り』2 1931.11）。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002）/『創作版画誌の系譜』（加治）

内海正性（うつみ・しょうせい）

1931（昭和6）年4月の春陽会第9回展に《池》《モンマルトン》（版種不明）を出品。『みづゑ』第315号（1931.5）には、「内海正性氏の池は鳥瞰図であるところに面白味がある」（税所篤二）との評がある。【文献】『春陽会第九回展覧会目録』（1931）（三木）

梅林新市（うめばやし・しんいち）

朝鮮釜山の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』（1940～1942）の第1冊（1940.5）に《不老虎（習作）》、第2冊（1940.8）に《習作》、第3冊（1940.12）に《竹》を発表。戦前戦後を通じて郷土玩具の研究を続け、『九州の郷土玩具』1～4（土俗玩具研究会 1934～1936）や『福岡県お宮の玩具』1～10（八幡民芸会 1955～1957）など郷土玩具、民話などの著作を多数上梓する。1940年当時、福岡市住吉先新屋に在住（『朱美通信』2）。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

梅原與惣次（うめはら・よそじ） 1901～1977

1901（明治34）年滋賀県八日市市（現在の東近江市）に生まれる。1919年彦根中学校卒。1927年、早稲田大学高等師範部英語科を卒業し、熊本県立中学校に奉職。1940年には山口県立豊浦中学校、そして1941年地元滋賀県立膳所中学校に転職。1946年には県立長浜商業学校校長となり、その後は彦根西高等学校校長や県教育研究所長などを歴任。1960年に退職後、俳句に専念し、俳句雑誌『霜林』『馬酔木』の同人となった。著作も『俳句風土記』など多数を上梓。また、滋賀文学散歩の会長などを務め、滋賀県の文学向上に尽力したことから、滋賀県文化賞（1976年度）、文化功労賞を受賞。趣味は郷土玩具の蒐集。版画については主に料治熊太の主宰した版画誌『版藝術』第9,18～21,23,24,36,58号（1932～36）や『郷土玩具集』、『土俗玩具集』に作品を発表した。料治との交流は、『版藝術』第9号（1932.12）に1930年の年賀状が掲載されていることから、1929年以前に始まったと思われる。版画の題材は日本や異国の郷土玩具の図柄が多く、特に『版藝術』第36号（1935.3）は梅原による西九州郷土玩具の木版画20枚からなる「梅原與惣次版画集」である。また、玩具以外では、朝鮮釜山で発行された版画誌『朱美之集』第2冊（1940.8）に『五月晴』、第3冊（1940.12）に《田園風景》を発表。郷土玩具を扱った作品と共有する素朴で温もりのある作風となっている。1977（昭和52）年3月に逝去。【文献】『滋賀県百科事典』（大和書房 1984）/『創作版画誌の系譜』（加治）

梅原龍三郎（うめはら・りゅうざぶろう） 1888～1986

1888（明治21）年3月9日京都市に生まれる。本名は良三郎。二科会、春陽会、国画会の創立に参画し、その旺盛な制作活動によって、大正・昭和を通じてわが国の洋画壇をリードした巨匠として知られる。油彩画を中心とした活動に比べあまり知られていないが、木版画を平塚運一、銅版画を河野通勢から手ほどきを受け、戦前の版画史にも注目すべき足跡を残している。その主なものとしては、1927年10月に開かれた個展（銀座・鳩居堂 主催：石原求龍堂）に自刻の版画を出品。同月の『HANGA』第12輯（版画の家 1927.10）に図版ではあるが《裸婦》（エッチング）が紹介されている。1930年には石原求龍堂より木版画集『裸婦十題』（彫・摺は平塚運一が担当）を刊行し、そのうちの《座裸婦》（目録では《半裸婦》）は、同年の第5回国画会展に出品した。1931年には日本版画協会会員に推挙され、翌年に協会がパリ展（1934年開催）の準備資金の一部に充てるために募集した「自画石版画頒布会」に協力し、作品を提供。1933年の「巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧会」を兼ねた第3回展に、《裸婦A》《裸婦B》（うち1点は『裸婦十題』の内の《脱裸婦》）を出品。翌1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展（パリ装飾美術館 主催：日本版画協会）」では1点を追加し、《Femme nue se déshabillant》《Femme nue se peignant》《Femme nue et pommes》の3点を出品した。また、1937年から1938年にかけて加藤版画店より『梅原龍三郎先生小品版画集』（5点、木版数十度刷、限定150部）を刊行。1942年の仏印巡回現代日本画展（ハノイなど巡回）にも版画《Roses》を出品している。戦後も版画を手がけ、1950年代のエッチング、1970年代のリトグラフがよく知られている。1952年文化勲章受章。1957年第27回朝日文化賞受賞。1986（昭和61）年1月16日東京で逝去。

【文献】『日本美術年鑑』昭和62・63年度版（東京国立文化財研究所 1989）／『みづゑ』273・334・394／桑原規子・春原史寛編「海外における日本現代版画展出品目録一覧」『日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』（平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書2008）／梅原龍三郎「私と版画」『版画藝術』12（1976.1）（三木）

浦 正義（うら・まさよし）

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第9号（1932.12）に賀状を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

浦田儀一（うらた・ぎいち） 1910～1998

1910（明治43）年5月29日静岡県静岡市鍛冶町に生まれる。東京などで伝統木版の彫りと摺りを学び、家業の浮世絵摺師「版隈」を継ぐ。創作版画の制作は、1929～1930年と1932～1934年の二期に集中している。第1期は、1929年10月の童土社同人第1回創作版画展（静岡）に木版画《無題》を出品し、栗山茂の主宰する『艸笛』第1号（1930.3）に《首》《猿》、中村岳（中村仲蔵）の主宰する『有加利樹』再刊第2輯（1930.3）に《首》《『艸笛』第1号に発表したものに手彩色》を発表している。第2期は、1932年11月には眞澄忠雄らと創作版画誌『版画座』（1932.11～1934.6 16冊か）を創刊して作品を発表した他、1933年8月の童土社第5回展に《酒壺》を出品し、童土社同人となっている。また、料治熊太の『版芸術』第18～21号（1933.9～12）、中川雄太郎編集の『かけた壺』第17号（1933.12）などにも作品を発表した。その後の版画家としての活動は不明であるが、1978年に「浮世絵木版画彫摺技術保存協会」（国の選定保存技術団体、同年認定）の会員となり、1981年には静岡県版画協会客員に推挙されている。1998（平成10）年静岡市で逝去。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房1967）／『50回記念版画集』（静岡県版画協会 1985）／『静岡の創作版画 昭和前期・版画家たちの青春』図録（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（三木）

浦野 信（うらの・まこと）

長野県上高井郡須坂に生まれる。長野県師範学校本科第二部2年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第1号2598年版（1938）に《神社前》を発表。1939年同校を卒業。1950年当時は飯田東中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿』（信州大学教育学部 1950）（加治）

占部喜平（うらべ・きへい）

東京の料治熊太が発行した版画誌『白と黒』第32号（1933.2）に《福岡鳩と梟》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

漆原栄次郎（うるしばら・えいじろう） 1882～1943

1882（明治15）年8月24日東京・芝の新幸町に生まれる。父環良は書家、母津るとの間に男5人女1人があって、その次男。摺の漆原三兄弟（栄次郎・三次郎・由次郎）として知られる。（明治30年代か）審美書院に長く仕事をし、版元小林文七のもとでも働いた。多くの仕事をしたらしいが、名が知れているのは、『浮世絵芸術』1934年6月号添付の裸婦小品版画《憩ひ》、「石川寅治

画・山岸主計彫・漆原栄次郎摺」で、解説には「摺刷技術を以て立つ人。斯界に押しも押されぬ大家」とする。また石川寅治の風景版画《驟雨一過》、あるいは石川の裸婦版画シリーズの当初は栄次郎の摺であったと伝える。1941年からは奥山儀八郎の版画（相撲絵12枚、風景13枚、肖像2枚）の摺にも携わっている。晩年は日本橋区浜町（2丁目84）住い、版画奉公会会員。1943（昭和18）年9月12日（『日本版画』128号「研究所通信」では「11日」とある）逝去。戒名は「釈浮浄栄信土」。【文献】奥山儀八郎「名摺師漆原栄次郎翁を悼む」『日本版画』129（1943.10）（岩切）

漆原三次郎（うるしばら・さんじろう）

摺師職の漆原三兄弟の三男にあたる。（岩切）

漆原木虫（うるしばら・もくちゅう） 1889～1953

近代の代表的木版摺師である。大英博物館囑託として版画修復や表具の仕事に携わったが、本来は木版摺刷師であり、彫板技術にも長け、修復の技術ももっていた。フランク・ウィリアム・ブラグインとの協業による多色木版版画の制作でも知られ、自らも自画・自刻・自摺の木版画を制作。風景画もあるが、花瓶に活けた花をテーマにしたシリーズの優品が知られる。木虫は1889（明治22）年3月12日東京に生まれる。本名は由次郎（よしじろう）。父環良（かんりょう）、母津るとの5男1女の四男。次男栄次郎、三男三次郎と共に摺師職であった。兄栄次郎のもとで修業（山中孝太郎門下との説もある）し、1907年にギリシャへ旅行。1910年にはロンドンで開催の日英博覧会へ審美書院のメンバーとして渡英し、伝統木版技術の実演を行った。その腕前をかわれ大英博物館所蔵、顧愷之《女史箴図卷》の木版複製制作（1912年秋完成）を行った。その後も同館囑託となり1919年までの7年間修復作業に従事。ブラグインとの共同制作では詩画集『ブリュージュ』（1919）、同『10の木版画』（1924）、版画集『フランク・ブラグインのスケッチブックより』（1940）等がある。ロンドン、パリ等で活動し、1941年1月に帰国、同年3月「漆原木虫版画展覧会」（1日～4日 日本橋三越、22日～30日 大阪三越）開催。帰国後も制作を続け、戦後は米国で評価が高かった。国内では「木虫（もくちゅう）」で、海外では「Yoshijirou」の方が知られる。晩年は世田谷区野沢在住。1953（昭和28）年6月6日東京で逝去。【参考文献】太田美喜子「東西芸術の架橋—版画家漆原木虫」『浮世絵芸術』149（2005）（岩切）

海野慎作（うんの・しんさく）

1929（昭和4）年10月に静岡で開かれた童土社同人第1回創作版画展に木版画《ほりばた》を出品。また、中村岳（中村仲蔵）の主宰する『有加利樹』再刊第1輯（1929.12）に《ふるさとの風景》、再刊第2輯（1930.3）に《風景》、再刊第3輯（1930.7）に《新鮮なる鮎》（各木版画）と詩「恋し母さん」を発表。また、栗山茂の主宰する『艸笛』第1号（1930.3）に《ふるさとの風景》を発表した。なお、名前については、童土社同人第1回創作版画展の目録では「海野慎吉」、『有加利樹』再刊第1・2輯では「S.UNNO」と表記されているが、同一人と判断した。【文献】『童土社同人第1回創作版画展覧会出品目録』（1929）／『創作版画誌の系譜』（三木）

海野猛之助 (うんの・たけのすけ)

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会(講師:平塚運一)に参加。その講習記念版画集『日本橋版画』(1937~1938)の創刊号(1937.12)に《椿》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

海野正男 (うんの・まさお)

1936(昭和11)年当時、豊橋エッチング協会幹事。地元の小・中学校の教員と思われる。【文献】『エッチング』47・48(樋口)

【え】

江上武夫 (えがみ・たけお)

1928(昭和3)年1月の日本創作版画協会第8回展に木版画《鳥居》、リノカット《壺》《宮の森》を出品。また、同年4月の春陽会第6回展に《さかな》(版画と推定されるも版種など不明)を出品した。【文献】『日本創作版画協会第八回展覧会目録』(1928)/『春陽会第六回展覧会出品目録』(1928)(三木)

江口建吉 (えぐち・けんきち)

白馬会系の洋画家たちが版画同人誌『白刀』[1910]を発行する。その〔準備号〕(刊行年不明)に《雪ノ日》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

江黒秀胤 (えぐろ・ひでたね)

静岡で文芸同人誌として出発した中川雄太郎編『かけた壺』(1930~1934)は、第14号(1931.11)から本格的に文芸と版画の同人誌として活動を始める。その第20号(1934.4)に《残雪》、第21号(1934.5)に《太鼓橋》、第22号(1934.6)に《チューリップ》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

江崎幸雄 (えざき・ゆきお)

朝鮮釜山の清永完治によって発行された版画誌『朱美之集』(1940~1942)の第4冊(1941.9)に《ひまわり》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

江渡益太郎 (えと・ますたろう) 1913~1997

1913(大正2)年青森県三戸郡五戸町に生まれる。青森師範3年時(1931)、今純三に版画の手ほどきを受ける。4年時に佐藤清蔵、前田兼太郎、飯田輝夫らと「青師版画研究会」を作り、機関誌『刀の跡』を創刊するが、2号で廃刊となる。1934年同校卒業後は34年間三戸郡などの小学校教員として教育版画の普及に尽力し、1977年五戸町功労者となる。戦後は1950年から1958年まで日本版画協会展に6回入選、1951・1952年の国展にも入選するなど版画家としても活動。病気で早くに教職を去ったが、自身の体験をもとに著した『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)は恩師今純三年譜と青森版画教育の歴史を詳細に綴った好著で、同年代で親交のあった関野準一郎は、その序文(抜粋)で江渡の功績を次のように記している。①日本版画協会の作家、日本国中に紙版画をひろめた功労者の一人。②昭和20年代後半から、30年代にかけて、青森県に版画教育をひろめた。③今純三年譜と年表は貴重な文献。④石沢小学校という小さな学校の学校長時代、よみうり全国版画コンクールで二年

連続『学校賞』を受賞。⑤日本教育版画協会副委員長を7年間、協会の発展に尽力した。晩年は千葉県市原市に移る。1997(平成9)年逝去。【文献】『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)/『青森県 近代版画のあゆみ展』図録(青森県立郷土館 1995)(樋口)

江藤純平 (えとう・じゅんぺい)

美術雑誌『美之國』第6巻第7号(美之國社 1930.6)表紙絵に木版画《[少女]》を発表。大分県白杵市出身で光風会会員の洋画家・江藤純平(1898~1987)と同一人物かは不明。(樋口)

江南史朗 (えなみ・しろう) 1901~2000

1901(明治34)年11月3日東京に生まれる。本名は兼吉。1916年博文館に入社し、1945年8月まで勤務。一時、本郷洋画研究所に通ったこともあるが、1928・29年頃から木版画を始め、1930年日本版画協会展第1回展に《造船所の見える風景》を出品。翌1931年には、博文館の元同僚で版画誌『白と黒』(1930~1934 50冊)を主宰する料治熊太の誘いを受け、同年4月の第13号より同人となり《佃の落日》を発表。以後、同誌をはじめ料治の主宰する『版芸術』(1932~1936 58冊)、『土俗玩具集』(1935~1936 10冊)、『再刊 白と黒』(1935 4冊)、『おもちゃ絵集』(1936 10冊)に数多くの作品を発表した。また、静岡の童土社が主催する展覧会にも参加し、1931年の第3回展に《初夏》《早春の箱根》《佃の落日》の3点、1932年の第4回展に《浜》《明石町河岸》《晩秋》の3点を出品。童土社の栗山茂が主宰する『飛白』の第1巻2号(1934.9)にも《海水浴場》を発表した。また、武井武雄の主宰する年賀状の交換会「榛の会」に、1935年の第1回から1953年の第19回まで同人として参加している。2000(平成12)年3月16日逝去。【文献】『江南史朗木版画集 昭和初期の東京風景と郷土玩具』(博文館新社 1989)/『創作版画誌の系譜』/「童土社展目録」(三木)

江野口盧風 (えのぐち・ろふう)

1919(大正8)年1月の日本創作版画協会第1回展に石版画《髪を梳く女》を出品。【文献】『日本創作版画協会第一回版画展覧会目録』(1919)(三木)

榎本喜芳 (えのもと・きよし) 1900?~1974?

1900(明治33)年頃生まれるか。谷中安規の豊山中学校時代の同窓である榎本憲阿(本名・一磨)の弟で、谷中と親交があった。1923年に谷中が京城(現ソウル)の自宅から榎本喜芳宛に送った挿絵入りの手紙が残されている。1925年中央美術展第6回展に洋画《T氏肖像》を出品。この年7月発行の『マヴォ』6号に詩「GANGUと其の声帯と」、8月発行の『マヴォ』7号に同じく詩「ORGORU、三個・」を寄せた。また同年10月発行の岡田龍夫が本の制作を担当した、萩原恭次郎詩集『死刑宣告』(長隆舎書店)にリノカットを4点提供している。1926年1月に谷中、飯田正一、村井亮、上田治之助ら5人で詩と版画の雑誌『莽魯聞葉』(もうろもんよう)を長隆舎書店から創刊する。2月に第2号を刊行。またこの年、白日会第3回展に出品。1928年白日会第5回展に出品。1941年大阪に移る。1974(昭和49)年頃に逝去。【文献】『谷中安規の夢 シネマとカフェと怪奇のまぼろし展』図録(渋谷区立松濤美術館 2003)(滝沢)

榎本千花俊 (えのもと・ちかとし) 1898～1973

1898 (明治 31) 年東京に生まれる。本名、親智。1916 年より籀木清方に師事。1921 年東京美術学校日本画科卒。1922 年第 4 回帝展に《旅》が初入選。第 9 回帝展にビリヤードに興ずる女性を描いた《撞球戯》を出品し、「モダンガールを描く画家」として話題となる。帝展、新文展に出品して日展委員を務めるほか、清方塾の郷土会や伊東深水、山川秀峰らの青衿会にも参加。竹久夢二の口絵や挿絵で知られる『婦人グラフ』に、夢二に代わって編集を担当した多ヶ谷信乃に採用されて、1927 年 4 月から 8 月にかけて、『婦人グラフ』第 4 巻第 4 号に木版《プロジェクト》、第 5 号に木版《夜会の女》、第 6 号に木版《山の湖》の口絵や第 7 号、第 8 号の表紙絵を担当した。1973 (昭和 48) 年逝去。【文献】川西由里「モガの肖像 榎本千花俊試論」『モダンガールズあらわる 昭和初期の美人画展』図録 (島根県立岩見美術館 2008) / 『大正イマジユリィの世界』図録 (渋谷区立松濤美術館 2010) / 『版画堂』目録 95 (2012.3) (樋口)

榎本宏行 (えのもと・ひろゆき)

1940 (昭和 15) 年 6 月の造型版画協会第 4 回展に木版画《馱》を出品。【文献】『造型版画協会第四回展目録』(1940) (三木)

江幡祐司 (えはた・ゆうじ)

1939 年に東京吉祥寺で発行された版画集『むさしの風景』其の 2 に作品を発表。現在この版画集は其の 1 (1938.11) が確認されているのみで、其の 2 は行方不明のため作品のタイトル等は不明である。【文献】『版画堂』目録 63 (加治)

江端芳市 (えはた・よしち) 1899～1986

1899 (明治 32) 年愛知県知多郡旭村に生まれる。三和村立第一尋常高等小学校の教員の時に、亀崎第一尋常小学校の大岩忠一の世界で開かれた平塚運一の版画講習会 (1931 年の第 2 回講習会) に参加。この時から、本格的に木版画を始めたと思われ、講習会参加者たちが版画を寄せた創作版画誌『運』(1928～? 13 冊か)にも、第 5 号 (1931) から参加していることが確認されている。1932 年には、小野忠重、武藤六郎らが主宰する「新版画集団」の結成に参加。機関誌である『新版画』(1932. 6～1935.12 18 冊) に第 3 号 (1932.8) から第 16 号 (1935.4) まで、9・12・14 号を除き毎号に作品を発表し、展覧会にも第 1 回展 (1932.10) から解散する 1936 年の第 6 回展 (1936.10) まで、第 5 回展を除き毎回出品した。またその間、1933 年の日本版画協会第 3 回展に《セメント工場》が初入選。以後、第 6 回展 (1937) を除き、1939 年の第 8 回展まで毎回出品している。1936 年の版画集団解散後は、1937 年の第 12 回国画会展に《室内》、翌 1938 年の第 2 回新文展に《傷痕軍人と看護婦》が入選。武藤完一は、「これも白衣の勇士と看護婦が鼠地色の背景からうまく浮き出て、小品ながら注目される作である」(『エッチング』72) と評している。以後、公募展への出品は無く、1942 年には平塚運一から指導を受けた木版画家たちによって結成された「きつつき会」に参加。同年の第 1 回きつつき会展の他、『きつつき版画集』昭和 17 年版 (1942. 8)、昭和 18 年版 (1943) に作品を発表している。1943 年の日本版画奉公会の発足時に会員として参加。当時の住所は愛知県知多郡旭村大字南粕谷町

となっている。なお、戦後の活動は不明である。1986 (昭和 61) 年 3 月 27 日逝去。【文献】加藤祐子「平塚運一による版画教育普及活動の一端：版画講習会開催とその余波—愛知県半田市亀崎を例に—」『版画家・平塚運一の世界展』図録 (高浜市やきものの里かわら美術館 2003) / 『版ニュース』4 (輝開 1998. 7) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

江原義夫 (えはら・よしお)

1928 年の美術雑誌『アトリエ』(アトリエ社) 主催の第 15 回誌上展覧会 (山本鼎選) に木版作品《農家》が佳作に選ばれ、同誌に図版が掲載される。当時埼玉県在住。【文献】『アトリエ』5-10 (1928.10) (樋口)

遠藤清栄雄 (えんどう・すえお)

京都在住の武田新太郎を顧問とする長野の版画誌『黄樹』第 2 号 (1938.5) に会員として名前が掲載されているが、同誌には版画未掲載。当時、北安曇野郡杜村松崎在住。【文献】『黄樹』2 (樋口)

遠藤教三 (えんどう・きょうぞう) 1897～1970

1897 (明治 30) 年 10 月 6 日東京に生まれる。1921 年東京美術学校日本画科卒。松岡映丘に師事し、映丘門下の岩田正巳、狩野光雅、穴山勝堂と 4 人で「新興大和絵会」を結成。後に山口蓬春、高木保之助、長谷川路可が加わる。1927 年 1 月より毎月 1 枚ずつ、日本木版画の曾ての光彩を目指して木版画集『日本新名所図会』の頒布を企画 (大和絵画刊行会、山口主計彫摺)。第 1 回は松岡映丘《榛名湖》、第 4 回《御宿》、第 11 回《十和田湖》(1927. 4・10) を遠藤教三が担当。更に翌 1928 年には同じく大和絵刊行会より『大和絵 日本八景』(西村熊吉彫) が刊行され、《雲仙岳》を制作する。1931 年新興大和絵会解散後は、帝展、新文展に出品。1938 年狩野光雅らと翔鳥会を結成。戦後は主に個展を中心に制作。女子美術専門学校教授、東京家政学院大学講師などを務め、1970 (昭和 45) 年 10 月 18 日逝去。【文献】岩切信一郎「日本近代版画資料集成 (1923～1929)」『東京文化短期大学紀要』(2002.3) / 『山田書店新収目録第 22 号』(1995.7) / 『20 世紀物故日本画家辞典』(美術出版社 1998) (樋口)

遠藤健郎 (えんどう・たけお) 1914～2009

1914 (大正 3) 年 8 月旅順 (現在の中国の大連市) に生まれる。小学校に入る頃に引き上げて、千葉に移り住む。1933 年県立千葉中学卒業。1939 年東京美術学校油絵科卒業。1940 年から 1943 年まで美術雑誌社アトリエ社勤務。戦後は中学美術教師を経て、1948 年から 1965 年まで千葉市役所教育委員会勤務。東京美術学校油絵科時代、学生たちが結成した同人グループ「デ・ザミ」に参加し、高田知明 (後に浜田と改姓) らと 3 年在席時に田辺至が指導する版画教室エッチング部に所属した。浜田知明によると「我々の頃からシュールレアリズムやアブストラクト等、海外の新しい運動が美術雑誌で紹介されるようになり、ムサ美 (当時の帝美) の諸君が幾つかのグループを作って展覧会をやり始め、それに刺激されて我々の一年上の先輩達が〈貌〉というグループを作り、〈デ・ザミ〉が生まれた」という。メンバーは川西治男、永田鉄雄、遠藤健郎、高田 (浜田) 知明、佐田勝など。一方、「画学生時代は、超現実主義のブルトン、ダリ、ミロ、エルンストなどに傾倒したが、若気のいたり、私はもうあん

な観念の遊び、絵空ごとは再びもうやらない」と当時を振り返る遠藤は、戦後は猥雑だが活気に満ちた世相を風刺画的に描く。現存する戦前の版画はごく僅かと思われるが、人物を描いた当時としては珍しい多色刷エッチング作品〔遠藤健郎作とされる〕が残されている。戦後は『巷の女』（1976）、『フラメンコ』（1982）、『市役所物語』（1991）、『魚河岸の人たち』（1995）、『景観 1992年4月 私の千葉市』（1999）などの銅版、石版画集や『白描戯画』（1956）、『てんでしのぎ』（1985）などの画文集も多数。2009（平成21）年9月2日逝去。【文献】『エッチング』57（1937.7）/『グループ〈貌〉とその時代展』図録（郡山市立美術館 2000）/『遠藤健郎絵画展—戦後は終わった』図録（千葉市美術館 2005）/「三木哲夫氏宛浜田知明書簡」（2009.12）（樋口）

【お】

小穴隆一（おあな・りゅういち）1894～1966

1894（明治27）年11月28日長崎県に生まれる。少年期を函館で過ごし、東京の開成中学校に学ぶも中退。画家を志し、太平洋画研究所に学び、中村不折に師事する。1912年の第10回太平洋画会展に入選。その後、光風会展、二科展に出品していたが、1922年の春陽会結成後は、1923年の第1回展から出品し、1926年無鑑査、1934年会員となり、1957年の第34回展まで毎回出品した。版画は、1913年の「仮面主催洋画展覧会」に木版画《玉乗り》2点と《富士山》、1916年の第16回異画会展に《をんな》を出品。1921年の『版画』第1巻第1号（1921.11）に蔵書票《ウーマン》を発表している。また、芥川龍之介や坪田譲治との交友も知られ、二人の著作の装丁や挿絵も手懸けている。1966（昭和41）年4月24日東京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和42年版（東京国立文化財研究所 1968）/『仮面主催洋画展覧会』目録（1913）/『中央美術』2-6（1916.5）/『創作版画誌の系譜』（三木）

及川文吾（おいかわ・ぶんご）1895～2000

1895（明治28）年、岩手県（現在の北上市）に生まれる。1920年東京美術学校西洋画科を卒業。卒業制作の油彩画《林檎とる頃》が第2回帝展に入選する。その後、帝展や白日会展、槐樹社展などに出品。版画の制作については、西田武雄が発行した日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第10号（1933.8）に銅版画を発表。1933年12月16日に東京美術学校西洋画科卒業の東京市内小学校教師で組織された光言会が同研究所においてエッチング講習会を開催（『エッチング』15 1934.1）。当時、東京市麹町区富士見尋常小学校の教師として光言会に所属していた及川もこの講習会に参加する。太平洋戦争中の1944年頃、郷里へ疎開。戦後は美術教師として北上市内の高校に1960年頃まで勤務。2000（平成12）年逝去。【文献】『いわて近代洋画100年展』図録（萬鉄五郎記念美術館内同展覧会実行委員会 2005）/『エッチング』10・15（加治）

及川康雄（おいかわ・やすお）1891～没年不詳

1891（明治24）年三重県に生まれる。1910年東京美術学校西洋画科志願に入学。同級生に大久保作次郎（当時は氏原姓）、恩地孝四郎がいた。1915年東京美術学校西洋画本科を卒業し、研究生となる。その後、銅版画を

手がけ、1929年に織田一磨らが結成した「洋風版画会」に参加。創立メンバーには大久保作次郎がいた。翌1930年の第1回展に《風景》など、1931年の第2回展に《磯》など5点、1932年の第3回展に《風景》などを出品。また、1931年1月に日本創作版画協会・洋風版画会・無所属の作家が結集した「日本版画協会」の結成にも参加。1933年の「巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧会」を兼ねた同会の第3回展（目録に「康夫」とあるのは誤記）に《府中の並木》《新道》の2点、翌1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展（パリ装飾美術館 主催：日本版画協会）」には《L'avenue de Foutchu》を出品している。なお、日本版画協会の会員名簿では1934年まで名前を確認できるが、当時の住所は東京市杉並区成宗町2丁目882番地である。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）/『資生堂ギャラリー七十五年史 1919～1974』（求龍堂 1995）/ 桑原規子・春原史寛編「海外における日本現代版画展出品目録一覧」『日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—』（平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 2008）（三木）

大井信一（おおい・しんいち）

静岡県に生まれる。東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）在学中、印刷工芸科の生徒による版画同人誌『刀画』に参加。第2号（1935.10）に《少女 街燈 時計台》を発表する。1937年に同校卒業後は東京朝日新聞社に勤務。現在『刀画』は2号のみを確認。【文献】『東京高等工芸学校一覧 昭和14年版』（東京高等工芸学校 1940）/『創作版画誌の系譜』（加治）

大石俊彦（おおいし・としひこ）

文化学院美術部を卒業。同校で石井柏亭らに学ぶ。1931年の第18回日本水彩画会展に《港の公園》《噴水》を出品し、キング賞を受賞。会員に推挙された。また、同年の第18回二科展にも油彩画が入選し、1934年の第1回展まで連続して出品した他、1937年の第1回一水会展などにも出品している。銅版画は1933年10月に文化学院で開かれた西田武雄の第1回講習会に参加して習得したと思われ、その時の作品は『エッチング』第12号（1933.10）に収録されている。その後、1935年の第4回日本版画協会展に石版画《長崎風景》《舞子》とエッチング《椅子に寄る女》が入選。以後の出品は無いが、1943年の日本版画奉公の発足時には、会員となっている。当時の住所は東京市中野区宮園通1ノ10番地。戦後は1947年の二紀会第1回展に出品。同人に推挙され、翌年は委員となり、のちに評議員なども務め、1980年に退会している。【文献】『第十八回日本水彩画会展覧会目録』（1931）/『二十周年記念日本水彩画会展覧会目録』（1933）/『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）/『エッチング』12・123（三木）

大岩雅泉（おおいわ・がせん）

1929（昭和4）年2月に開催された京都創作版画会第1回展に木版画《川辺ノ朝》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』（京都創作版画会 1929）（三木）

大岩忠一（おおいわ・ちゅういち）1891～没年不詳

1891（明治24）年愛知県生に生まれる。戦後、緑汪

とも号す。岡崎中学校、県師範学校（岡崎の県第二師範学校か）を卒業し、愛知県知多郡亀崎第一小学校の手工科担当の教員になる。1927・31・33年などに同校で開かれた平塚運一の版画講習会の実施に尽力。版画に強く引かれ、学校の授業に版画を積極的に取り入れる一方、講習会に参加した教員仲間と創作版画誌『運』（1928～？

13冊か）を発行。また、平塚の主宰する『版』（第7・8号）、『版画研究』（第1号）、料治熊太の『版藝術』（第9・14号）、長野の小林朝治の『椽』（第6号）などにも作品を寄せている。日本版画協会へは、1931年の第1回展に会友として招かれ《ラッパ草》を出品。1932年に会員に推挙され、同年の第2回展に《金盞花》、1933年の第3回展に《いたどり》《海芋》《紫露艸》（新作）《アネモネ》（新作）を出品した。なお、第3回展の出品目録には略歴の紹介があり、「農民美術研究所に版画を学ぶ」との記載もあるが詳細は不明である。その後は公募展への出品は無く、『日本版画協会々報』の第28号（1938.8）には、学校長に栄転し愛知県知多郡東村藤江に転居したことや、1946年2月号には、「無事生残りましたが長男は御国に命を捧げ長女は猶満洲から生還いたしません。お隣の岩田覚太郎氏も亦健在です」といった消息が伝えられている。戦後も日本版画協会の会員として名簿に登載されていたが、出品は確認出来ず、1953年に退会したようである。【文献】加藤祐子「平塚運一による版画教育普及活動の一端：版画講習会開催とその余波—愛知県半田市亀崎を例に一」『版画家・平塚運一の世界展』図録（高浜市やきものの里かわら美術館 2003）/『創作版画誌の系譜』/「日本版画協会展目録」（三木）

大内青圓（おおうち・せいほ） 1898～1981

1898（明治31）年12月12日東京市麻布区北日下窪町に生まれる。本名は正（ただし）。父は仏教運動家の大内青巒、兄は洋画家の大内青坡。1922年東京美術学校木彫部選科を卒業。同年の第11回院展に初入選。1927年に同人となり、1960年の第45回展まで続けて出品。父青巒の影響もあり一貫して仏教彫刻を彫り続けた。一方、1936年の改組第1回帝展に指定され出品。翌年の第1回新文展からは無鑑査となり、以後、新文展・日展にも出品。1948年の第4回日展では審査員を務め、1957年の第13回展まで毎回出品した。1961年以降は、院展彫刻部が解散したため、個展を作品発表の場とし、1969年には日本芸術院会員となっている。版画は、拓墨摺りを得意とし、1920年代後半から1930年代にかけて多くの足跡を残した。現在確認される最初の動きとしては、1928年の日本創作版画協会第8回展に《ある物語の挿絵》を出品し、会員に推挙されている。翌年の第9回展にも《扉絵、試作》《雪と若草》《夕月》《踊り子》《若き庭造りの歌》《飛行せる魔王》《夜》の7点を出品した。また、1929年の春陽会第7回展に《蛾（頭部習作）》《春（部分習作）》《大根》《たけのこ》の4点を出品（ただし、《蛾》《春》の2点は売価が各150円とあり、木彫かもしれない）。翌年の第8回展にも《山茶花》《新東京扉絵（大阪〔坂か〕上ヨリ見タル富士）》《物語詩扉絵》の3点を出品した。1931年の日本版画協会の結成にも参加。第1回展に《富士》《おぢぎ草》《頭巾》《図案の一》《図案の二》の5点を出品。1933年の「巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧会」を兼ねた第3回展に《収穫》《物語詩挿絵》など旧作17点と新作《蓮華草》を出品。翌1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展（パリ装飾美術館 主催：

日本版画協会）には《Haut plateau》《Fleurs》の2点を出品した。その後、同展への出品は無く、1941年の第10回展で企画された「十年回想会員作品自選」に《蓮華草》（1933）を出品したのみである。1935年には玉村方久斗、兄青坡らと「新興美術家協会」を結成。同年の第1回展から1939年の第5回展ころまでは運営に積極的に参加し、版画のほか、彫刻・油彩画・テンペラ画などを発表した。版画は、手元に目録があるものだけではあるが、第1回展に《朝》、翌1936年の第2回展に《献華》2点と《栗鼠（美粧院包装紙）》を出品している。この他、料治熊太の主宰する創作版画誌『白と黒』（1930.2～1934.8 50冊）と『版藝術』（1932.4～1936.12 58冊）の常連で、1930年から1934年にかけて版画・詩などを数多く発表している。また、中島重太郎の創作版画倶楽部とも関係が深く、中島の発行する『版画 CLUB』（1929.4～1932.3 16冊）に作品図版や関連記事がしばしば掲載され、1932年には『大内青圓氏拓摺版画集』（未見）が同倶楽部から発行されたようである。1981（昭和56）年2月21日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和57年度版（東京国立文化財研究所 1984）/『創作版画誌の系譜』（三木）

大内ノブ（おおうち・のぶ）

1934年6月23日東京市下谷区金曾木小学校において、東京市下谷区凶画手工芸主任教諭対象のエッチング講習会が開かれた。当時、同小学校に勤務していた大内も参加し、制作された作品は西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第21号（1934.7）に掲載された。【文献】『エッチング』（加治）

大内猷哉（おおうち・ゆうや）

長野県師範学校本科第一部1年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第3号〔1941〕に《放送局》を発表。【文献】『樹水』3（加治）

大垣泰治（おおがき・たいじ）

1935（昭和10）年の第4回日本版画協会展に木版画《相撲》を出品。小野重重は、「大垣泰治氏の「相撲」は興味ある構想であるが刷の乱雑なため効果を弱めてゐる」（『日本版画協会米国展準備展の現代版画について』『みづゑ』37 1935.10）と評している。また、1934年7月に神戸の御影師範学校で開かれた西田武雄のエッチング講習会に参加しているが、参加時の所属は「武庫郡魚崎小学校」とある。【文献】『第四回日本版画協会展覧会及日本現代版画米国展準備展観目録』（1935）/『みづゑ』37/『エッチング』22（三木）

大兼 實（おおかね・みのる） 1908～1976

1908（明治41）年10月21日東京に生まれる。1926年太平洋画会研究所に入所。1929年第16回二科会展に《池畔夏景》が初入選。この頃二科研究所「番衆技塾」に学んでいたと思われ、『エッチング』第12号（1933.10）に番衆技塾の生徒としてエッチング《〔屋外風景〕》が紹介される。また同じく第12号の「文化学院第一回〔エッチング〕講習会」や第14号（1933.12）「文化学院専修科第二回〔エッチング〕講習会」には、堀忠義や谷口富美枝とともに参加の記事があり、第15号（1934.1）にエッチングによる模写作品と思われる《〔法隆寺金堂壁画〕》が図版で紹介されている。1933年文化学院美術科

卒業。1937年渡欧、ローマやパリで学び、1945年帰国。1946年一水会会員。1947年二紀会創設に参加。以降は二紀会を中心に作品発表を続け、監事、委員として活動した。1976(昭和51)年3月23日逝去。【文献】『エッチング』12・14・15/『日本美術年鑑』昭和52年版(東京国立文化財研究所 1979)(樋口)

大川 要(おおかわ・かなめ)

1928(昭和3)年の第9回帝展に木版画《花》を出品。翌1929年の日本創作版画協会第9回展に《高倉雛》、同年の光風会第16回に《花》を出品している。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)/『日本創作版画協会第九回展覧会目録』(1929)/『光風会目録集』(光風会 1999)(三木)

大川徳兵衛(おおかわ・とくべい)

和歌山県新宮市出身。1932(昭和7)年に新宮市で結成された「熊野きつき会」の会員で、5月の第1回展に木版画《市田川風景》《新宮ふうけい》を出品。翌1933年10月には和歌山県の紀南地方の作家が結集した「全熊野美術家協会」の結成に参加し、版画部に属した。同会は、戦前は1942年頃まで新宮市で展覧会を開催したが、出品の有無は不明。戦後は1947年に「熊野美術協会」と改称し、活動を再開したが、再開時の会員でもあった。なお、名前については、「徳衛」「徳平衛」の表記もある。【文献】『第一回版画展覧会出品目録』(熊野きつき会 1932)/『和歌山の作家と県内洋画壇展《1912-1945》』図録(和歌山県立近代美術館 1984)/『熊野美術協会 第30回記念特輯号』(1978)(三木)

大河原良之(おおがわら・よしゆき)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)5年在学中、生徒が発行した版画集『刀再版』(1940~1941)に参加。その第1号(1940)に《土蔵》、第2号(1940.10)に《郊外》、第3号(1941)に《イソップ》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

大木 明(おおき・あきら)

1938(昭和13)年4月の造型版画協会第2回展に《葛飾風景》、翌1939年5月の第3回展に《眼帯》を出品。版種は不明。目録の住所は東京。【文献】『造型版画協会第二回展目録』(1938)/『造型版画協会第三回展目録』(1939)(三木)

仰木 茂(おおぎ・しげる) 1904~没年不詳

1904(明治37)年福岡県に生まれる。1921年渡欧。はじめの4年間はベルリンに滞在。その後、パリに移る。1936年の第2回在巴里日本人美術展、1929年の第3回仏蘭西日本美術家協会展、1930年のサロン・デ・ザンデパンダンに出品。1932年帰国。1933年の第8回国画会展に滞欧作の油彩画《クラマールの冬》など5点と木版画《洗濯する女》《女の顔》を出品。夫人の仰木ゲルトロードと共に絵画部の会友に推挙された。出品時の住所は、東京市渋谷区原宿1ノ138。また、同年に「仰木茂氏夫妻滞欧作品展」(三越)も開いている。その後は、版画の出品は無いが、1937年に国画会絵画部同人となり、1940年の第15回展を除き、1944年の第19回展まで毎回油彩画を出品している。なお、戦後の消息は不明である。【文献】「国画会展目録」/『みづゑ』341(1933.8)

/『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』図録(徳島県立近代美術館 1998)(三木)

大口保夫(おおぐち・やすお)

長野県に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科の生徒による版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《芝浦風景》と《銀座》を発表。1937年に同校卒業後は凸版印刷(株)に勤務。現在『刀画』は2号のみを確認。【文献】『東京高等工芸学校一覽』昭和14年版(東京高等工芸学校 1940)/『創作版画誌の系譜』(加治)

大久保作次郎(おおくぼ・さくじろう) 1890~1973

1890(明治23)年11月24日大阪市に生まれる。旧姓は氏原。1911年叔父の大久保家を継ぐ。1915年東京美術学校西洋画科本科を卒業。研究生になり、1918年修了。美術学校在学中、1911年の第5回文展に初入選。1915年の第9回文展に再び入選。以後、文展・帝展に出品を重ね、1923年から1927年まで渡仏。帰国した1927年の第8回帝展の審査員となり、その後もたびたび帝展・新文展の審査員を務め、1940年には「創元会」の結成に参加するなど、官展系の作家として活躍した。なお、戦前の版画に関連する活動としては、1929年暮の織田一磨らの「洋風版画会」の結成に参画。1930年5月の第1回展と1931年7月の第2回展に出品。第2回展の出品作は、《幽谷》(エッチング)など2点だった。また、1931年1月に日本創作版画協会・洋風版画会・無所属の作家が結集した「日本版画協会」の結成時の会員である。展覧会への出品は無かったが、翌1932年に協会がパリ展(1934年開催)の準備資金の一部に充てるために募集した「自画石版画頒布会」に協力し、作品を提供している。戦後は日展の審査員・評議委員・顧問を務め、新世紀美術協会の結成(1955)にも参画。1963年には日本芸術院会員になっている。1973(昭和48)年2月28日東京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和49・50年度版(東京国立文化財研究所 1976)/『資生堂ギャラリー七十五年史 1919~1974』(求龍堂 1995)/『日本版画協会史 1931~2012』(日本版画協会 2012)(三木)

大久保一(おおくぼ・はじめ) 1911~1991

1911(明治44)年長崎県五島に生まれる。父は奉天で貿易商(大和洋行)を経営し、幼時より同地に育つ。大阪に遊学し、中之島洋画研究所(「信濃橋」ではなく「中之島」という名称が正しければ、遊学の時期は1931年以降のことになる)に学び、また版画を川西英に学ぶという。1932年の『版画CLUB』第4年第2号(1932.3)の「創作版画年賀葉書第一回誌上展」に年賀状の図版が紹介されるが、現在確認できる版画の最初である。同年4月の小野忠重ら結成した「新版画集団」に奉天から参加。機関誌『新版画』(1932.6~1935.12 18冊)の第1号(1932.6)に木版画《陸橋》と「作者言」を発表。以後、第3・4・6~9号(1932.8~1933.6)に作品と詩などを発表している。また、同集団の主催する展覧会の第1回展(1932.10)に《陸橋》《鳥》《解説者》《幼女像》《奉天浪速通風景》の5点を出品。以後、1934年の第4回展と第1回版画アンデパンダン展まで毎回出品した。なお、1932年12月の会員名簿の住所は、奉天市浪速区浪速通20番地。その後、中断があり、1938年の造型版画協会第2回展に木版画《哥薩克の靴屋》を出品。以後、1943

年の第7回展(会友として出品)まで、木版・合羽版・型紙版などを毎回出品した。満洲での活動は、1940年の第3回満洲国美術展に版画《室内》(合羽版か)を出品し、佳作賞を受賞。翌1941年の第4回展にも入選。また、1939年ころに奉天で松永(栗山)茂、松村松次郎らと「青々会」を結成し、展覧会を開催(1939・1940か)している。戦後は長崎県五島に引き上げ、教員となったようであるが、活動の詳細は不明。1984年頃は大阪府八尾市東山本新町に住んでいた。1991(平成3)年5月2日逝去。【文献】『版ニュース』4(輝開 1998.7)/飯野正仁編『満洲美術』年表(私家版 1998)/『第2回青々会美術展』目録(1940か)/『創作版画誌の系譜』(三木)

大倉槌三郎(おおくら・つちさぶろう)

1922年から1937年まで、宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)の図画の教師を務める。専門は油彩画であり、課外活動では美術部「パレット会」の顧問を務めた。当時、同校には川上澄生が英語教師として赴任しており、川上に心酔した生徒たちが版画誌『刀』(1928-1932)を発行していた。『刀』にはパレット会所属の生徒も多く参加しており、大倉も生徒たちから参加を望まれたものと思われる。その第4輯(1929)の《風景》をはじめ、第5輯(1929)の《グロキシニヤ》以降第6・7・8・9・10・12輯(1929～1931)に木版画を発表する。『図解日曜画家 デッサンスケッチ編』(文海堂 1961)の著書あり。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000)/『創作版画誌の系譜』(加治)

大河内敬一(おおこうち・けいいち)

愛知県岡崎では村松隆次や小野英一らが版画誌『版画』(1925)を刊行する。3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、『試作』(1925～1926)と改題して発行する。その『試作』創刊号(1925.6)に《アルキペンコから》を発表。当時、東京ではロシア・アバンギャルドなど西洋の新興美術が紹介されており、《アルキペンコから》はその作品を版画に起したものと見られる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

大河内信敬(おおこうち・のぶひろ) 1903～1967

1903(明治36)年8月21日東京市下谷区谷中清水町3番地に生まれる。号は清水丁三。中学校在学中の1917・18年頃、水彩画を板倉賛治、版画を小泉癸巳男に学び、また太平洋画会研究所にも通う。1922年小泉癸巳男らと創作版画誌『君と僕』(1922.10～1923.8 5冊)を創刊。小泉とともに毎号に版画を発表。また、詩文なども発表する。1928年明治大学商科を卒業。東京瓦斯株式会社に入社。1929年に旭正秀、小泉癸巳男らが結成した『版画』(素描社 1929.2～1930.5 5冊)の同人になり、第4号(1930.3)に《壺》、第5号(1930.5)に《女優》を発表。1930年に開かれた『版画』同人第1回展に《酒壺》など14点を出品した。また、翌1931年には第1回日本版画協会展に《不忍池夕景》《菓子図》《ダリア》を出品したが、以後の出品はない。この年の末、病を得て瓦斯株式会社を退職。本格的に画家を志し、本郷洋画研究所に学び、また寺内萬治郎の指導を受けた。1932年の第19回光風会展に初入選。以後、同展を軸に作品を発表。1937年会友、1940年会員となり、1967年の第53回展まで出品を重ねた。その間、1933年の第14回帝展に初入選。以後、帝展・新文展にも出品した。また、1937

年には4月から12月まで渡欧し、各地の美術を視察。帰国後は、日本の伝統芸術に関心を持ち、華道、茶道、盆石を学んでいる。戦後は、光風会展の他、1947年に朝井閑右衛門らと「新樹会」を結成し、以後、同展にも毎年出品。1954年からは日展にも出品している。1967(昭和42)年12月1日東京都で逝去。翌1968年光風会・新樹会・日展でそれぞれ遺作が展示された。なお、名前の読みは画面サインによる。【文献】『大河内信敬 回顧展』図録(東京・松屋銀座店 1973)/大河内信敬「好きな道」『BBBB』4(1950.3)/『日本美術年鑑』昭和43年版(東京国立文化財研究所 1969)/『創作版画誌の系譜』(三木)

大河内亮璋(おおこうち・りょうしょう)

1929(昭和4)年2月の京都創作版画会第1回展に木版画《人物》《風景》《風景》の3点、1933年1月の第3回展に《M児の描ける顔》《人形》《浜の子》《伏見人形》《花》《支那面の》の6点を出品。また1936年8月に開催された京都エッチング協会講習会(講師:西田武雄 会期:8・9日 会場:関西小国民社)にも参加している。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』(京都創作版画会 1929)/岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)/『エッチング』47(三木)

大崎周英(おおさき・しゅうえい)

新潟では文芸・美術などの芸術同人誌『土塊』(1927～1929)が発行された。その第1号(1927.12)に《自然と人生》と短歌「雑唱」を発表するが、第2・3号には版画の発表はなく、短歌のみが寄稿されている。【文献】『佐藤哲三の時代』図録(新潟県立万代島美術館 2008)/『創作版画誌の系譜』(加治)

大澤鐵面(おおさわ・てつもと)

1919(大正8)年5月の日本創作版画協会第1回展大阪展に木版画《去處》を出品。翌1920年の第2回展にも木版画《春の泥》を出品した。当時、大阪に住む。【文献】三木哲夫「[資料]日本創作版画協会資料総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要 第2号』(和歌山県立近代美術館 1997)(三木)

大下藤次郎(おおした・とうじろう) 1870～1911

1870(明治3)年7月9日東京市本郷に生まれる。家業は宿屋、馬車間屋。1885年東京法学校に入学するが、家業に従事しながら、中丸精十郎に師事。初め油彩画を描くが、中丸精十郎所蔵の水彩画作品を見て興味を持ち、4歳年下の三宅克己の影響で水彩画に専念する。1901年森鷗外の序文を付した水彩画独習の小型本『水彩画之葉』を蒲原有明の斡旋で新社から出版(1000部)。2年間で15版を重ねるベストセラーとなり(第16版は内容を改定して書名を『水彩画階梯』と改める)、坂本繁二郎、斉藤与里、萬鉄五郎など地方で美術家を夢見る若者に大きな影響を与えた。1902年10月に2度目の外遊を果たし、アメリカ、欧州を廻って1903年6月に帰国。水彩画普及を目的に1905年水彩画の研究団体「春鳥会」を興し、月刊美術雑誌『みづゑ』を創刊。丸山晚霞、河合新蔵、真野紀太郎らの協力で1906年神田に水彩画講習所を開設。1907年小石川水道端に日本水彩画会研究所と名称を改め、各地で水彩画講習会を開くなど精力的な活動の途上、1911(明治44)年10月10日急逝した。水

彩画流行の一因に、明治末頃から盛んになった絵葉書ブームがある。大下は三宅克己、丸山晚霞とともに風景絵葉書（水彩画を石版或はコロタイプ等で複製印刷）の人気作家の一人で、日本葉書会から『水彩絵葉書』（石版精巧13度摺 6枚1組）を出版。絵葉書競技会を主宰し、大下藤次郎撰による「春鳥会絵葉書」（6枚1組）を発行。『みづ糸』第5号（1905.11）に水彩画石版《江戸川スケッチ》をはじめ、第74号（1911.4）の《島の夕陽》（水彩画石版）まで、多数の水彩画、グワッシュ画、鉛筆画の石版あるいは木版挿画を『みづ糸』に掲載する。【文献】『みづ糸』900号（1980.3）/『近代の美術 58 日本の水彩画』（至文堂 1980）/『ローダー・コレクション 美しき日本の絵はがき展』図録（通信総合博物館ていぱーく 2004）/『大下藤次郎の水彩画』図録（島根県立岩見美術館 2008）/『大下藤次郎展 美しき自然、友』図録（神戸市立小磯記念館 2011）（樋口）

大城貞夫（おおしろ・さだお）1908～1981

1908（明治41）年2月6日静岡県浜名郡中瀬村に生まれる。1929年静岡県立浜松工業学校図案科を卒業。同校助手となり、同校の図案科教員で俳人の相生垣瓜人（1898～1985、本名貫二、東京美術学校製版科卒業、相生垣秋津の弟）に師事し、木版画を始める。1933年中学校教員資格検定試験に合格し、同校教諭になる。1935年の第4回日本版画協会展に《ガード》《酒場》が初入選。1937年の第6回展に《将棋》《城の址趾》が再び入選し、以後1940年の第9回展まで連続して出品。また、この1940年には第15回国画会展に《夏終る（浜名湖瀬戸）》《新秋》が入選した。その間、1936年に相生垣瓜人の紹介で栗山茂を知り、1938年に童土社同人となり、同年の第9回展から1942年の第13回展まで出品している。1942年から1945年にかけては、京都、茨城県古川、愛媛県今治の航空機乗員養成所に勤務し、1944年には日本版画協会会友に推挙されたが、出品はなかった。今治で終戦を迎え、戦後は郷里の浜松第一中学校に勤務。1946年の第14回日本版画協会に再び出品し、会員に推挙されるも、1948年の第16回展の出品のみで終わったようである。1948年には静岡県版画協会の結成に参加。翌年の第1回展に出品したが、京都市立淀中学校教頭として赴任したため退会。翌1950年には立校を辞め、染色図案家として独立。1951年には徳力富吉郎らと「京都版画協会」を結成し、1955年の第5回展まで出品した。1980年に静岡県浜北市に転居。翌1981（昭和56）年3月1日同地で逝去。【文献】『特別展・郷土の生んだ版画家 大城貞夫 遺作木版画展』目録（浜北市文化センター 1982）/『第50回記念版画集』（静岡県版画協会 1985）（三木）

大須賀太郎（おおすが・たろう）

1931年8月3日から7日まで、大分市で開催された東京創作版画倶楽部（中島重太郎）主催、大分市教育委員会後援の創作版画講習会（講師平塚運一）に参加。【文献】『郷土図画』1-5（大分県美育研究会 1931.10）（樋口）

大瀬紗香慧（おおせ・さかえ）

「内地」の創作版画運動は、1930年代、当時「台湾日日新報」に勤務していた西川満（1908～1999 福島県生）が発行の文芸・版画誌『媽祖』（1934.10～1938.3全16冊）などを通じて次第に台湾にも広がり、『媽祖』に集った台湾在住の画家立石鉄臣や宮田弥太郎らを巻き込んで、「単

なる趣味としてではなく、真面目に創作版画を研究製作普及し、以って台湾文化の普及を図る」ため、1935年5月「創作版画会」が設立された。会員は西川満、立石鉄臣、宮田弥太郎など8名で、大瀬紗香慧も創立会員の一人として名を連ねている。ただし、プロフィールやどのような作品を制作したかなどの詳細は不明。【文献】西山純子「華麗島の創作版画—1930年代・台湾—」『千葉市美術館研究紀要 採蓮』7（2004.3）（樋口）

大須賀力（おおすが・つとむ）1906～2009

1906（明治39）年3月26日東京神田に生まれる。1926年東京美術学校彫刻科塑造部に入學し、建畠大夢に師事。在学中、校友会版画部で木版画を試み、1928年6月に校内で開かれた「第3回椎の樹版画展」に《火の見》《別所》を出品。1930年11月の「〔椎の樹〕版画展」にも《秋果》を出品した。1931年彫刻科塑造部本科を卒業。卒業後は、同年の第12回帝展に彫刻《浴》が入選。翌1932年の帝展で特選を受賞し、以後、帝展・新文展に出品を重ね、1937年には文展無鑑査になり、官展系の彫刻家として歩んだ。戦後は、1946年の第2回日展に出品し、翌年の第3回展から招待となり、1949年の第5回展の審査員を務めるなど、同展で活躍。1976年千葉県文化功労者、1994年市川市名誉市民となっている。2009（平成21）年7月24日千葉県市川市で逝去。【文献】『校友会月報』27-3、29-7（東京美術学校 1928.7、1931.1）/『文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 明治四十年—昭和三十二年』（社団法人日展 1990）（三木）

大田耕士（おおた・こうし）1909～1998

1909（明治42）年2月18日兵庫県赤穂市に生まれる。本名は末夫。1927年尋常科正教員講習会で教員の資格をとり、同年12月には兵庫県加古川市の小学校に採用される。1931年8月に上京し、新興教育の第2回講習会に参加し、ついでプロレタリア美術家同盟大会に出席し検挙され拘留される。1934年からは、関西漫画研究所を結成。会誌『カリカチュア』の発行。1936年には『カリカチュア研究第1回作品集』（発行所カリカチュア研究）を発行する他、風刺画研究会の結成に携わるなど、風刺画に関する運動・研究に取り組む。1937年5月に再び上京。本郷美術研究所、滝野川彫塑研究所に通う。『学校美術』（1928年創刊）の編集に携わるのを期に、織田一磨、恩地孝四郎をはじめとした多くの版画家達と交流し、さらに銅版画研究のため日本エッチング研究所（西田武雄主宰）に通い、今純三、駒井哲郎、関野準一郎らとも知り合う。『エッチング』61号を始めに、65・71・72号に文章、作品を掲載する。同年7月にエッチング漫画展（銀座・紀伊國屋書店）に出品する。9月には東京市文京区湯島小学校の図工科専任教師となる。1938年造型版画協会（1937年結成）に参加し、第2・3・4回展と発表する。また自宅（根津）を事務所として、久米宏一、小野澤亘、松下知夫らと東京漫画研究所を開設。5月には『カリカレ』（編集兼発行印刷人小野澤亘）を創刊し、石版画を発表する。夏、満洲に旅行する。1939年『カリカレ』6月号に自画石版画《支那芝居》を特集する。翌年には結成された「日本エッチング作家協会」の準会員となり、12月の第1回日本エッチング展（銀座・資生堂）に《支那芝居》を出品する。1941年2月に『カリカレ』の内容を指摘され検挙される。1943年5月に日本版画奉公会が結成され理事となる。1944年日本版画協会の会員に推挙

される。同年3月に召集を受け岡山の連隊に入営し、中国前線、応城に配属される。現地で終戦をむかえ捕虜となる。1946年5月に復員し、画と文『新東京風景』を青木堂より発行する。1947年には、飯野農夫也、鈴木賢二、滝平二郎らによって結成された「刻画会」に李平凡とともに参加する。さらに恩地孝四郎が主催する「一本会」に参加し、『一木集』III・IV・VI(1947.7・1948.9・1950.12)に木版画を発表する。1948年に滝平二郎、新居弘治、鈴木賢二、三井寿らと「日本版画運動協会」を創設し、事務局を担当する(後、上野誠に引き継ぐ)。機関紙『版画運動』(編輯滝平二郎、発行者大山茂雄 1949)『日本版画新聞』(編輯滝平二郎 1952)、職場版画サークルの作品、中国の版画作家達の作品などを中心に紹介する。1951年12月、理事長に平塚運一、顧問に恩地孝四郎を迎え、日本教育版画協会を創立し常任理事となる。翌年には『版画の教室—生活版画の手引き—』を著し、さらに第1回作文教育全国協議会(日本作文の会主催・岐阜県中津川市)に参加し、全国の児童の版画や中国版画を展示するなど、今後の教育版画の取り組みに大きな影響を与える。12月に『はんが』が創刊される。1957年第3回全国版画教育研究大会(早稲田大学)で、委員長に松田義之を迎え、副委員長となる(1961年には委員長に就任)。さらに機関紙『はんが』の編集・発行に携わる。1994年に北京を訪問し、長年の版画教育と日中文化交流にかかわる貢献に対して、中国美術家協会副主席、中国版画協会名誉主席の古元氏より表彰を受ける。1998(平成10)年3月8日逝去。【文献】平田隆一編『大田耕土著作集—教育版画のあゆみ—』(五所川原市教育委員会 1999)(河野)

太田三郎(おおた・さぶろう) 1884~1969

1884(明治17)年12月24日愛知県西春日井郡西枇杷嶋町に生まれる。17歳で上京、白馬会洋画研究所で黒田清輝に師事。日本画を寺崎広業に学び、沙夢楼(さむろふ)とも号す。1910年第4回展に油彩画《ビーヤホールの女》が初入選、1913年第7回展で油彩画《カッフェの女》が三等賞を受賞。当時の洋画家には珍しく、『新小説』(春陽堂)などに木版口絵を手掛け、明治末頃からの絵葉書ブームに乗じた『ハガキ文学』(日本葉書会)や『女学世界』(博文館)などにオール・ヌーボー風な意匠の表紙絵や絵葉書の図案を描く。また洋画趣味の普及からスケッチや水彩画を始める初心者のために『スケッチ画法』(弘成館書店 1906)、『鉛筆スケッチ習画帖』(第二輯のみ確認 日本葉書会 1907 石版全12葉)、木版刷の俗謡画集『朝霧(あさぎ里)』上・下巻(精美堂 1912)を出版する等早くから版とかかわる。1913年2月創刊の文芸雑誌『ル・イブウ』(LE HIBOU)に《妊婦》を発表。大正期に「版画」を特集した『現代の洋画』第23号・版画号(日本洋画協会 1914.2)では、山本鼎、石井柏亭、坂本繁二郎の外に、戸張孤雁、岡本帰一、南薫造、富本憲吉などと並んで太田三郎が「世間に定評のある〔版〕画家」として紹介され(松本文雄「新木版画の去来」、大正期の代表作の一つ多色木版《カフエの女》(『現代の洋画』第23号・版画号)掲載)や自画木版《銭湯(女湯とも呼ばれる)》(1914)を制作するが、版画の制作はこれにとどまり、以降制作は知られていない。1920年~1922年まで渡欧、フォービズムやキュービズムの影響を受けて帰国。以来、光風会、帝展に出品し、1924年光風会会員、1933年帝展審査員となる。また君

島柳三のペンネームで川端康成『浅草紅団』(東京朝日新聞連載 1929.12~1930.3)や矢田挿雲『太閤記』(報知新聞連載 1924~1934)などの挿絵画家としても知られる。戦後は郷里の愛知に戻り、愛知県の美術振興に寄与。1955年~1960年まで愛知県立美術館館長を務めるが、病気のため退いて、晩年は東京都武蔵野市に移る。1969(昭和44)年5月1日同地で逝去。【文献】『現代の洋画』23(版画号)(日本洋画協会 1914.2)/『日本美術年鑑』昭和45年版(東京国立文化財研究所 1971)/『創作版画の誕生』図録(渋谷区立松濤美術館 1999)/『ローダー・コレクション 美しき日本の絵はがき展』図録(通信総合博物館ていぱーく 2004)(樋口)

太田重範(おおた・しげのり) 生年不詳~1966

富山県に生まれる。1924(大正13)年東京美術学校彫刻科木彫部に入學。木彫を学ぶかたわら、美術学校の仲間たちと校友会版画部をつくり、1928年2月に校内で「椎ノ樹第1回創作版画展」を開催。同展に木版画《雪景》《雪の下より》《雨に暮るゝ》を出品した。第2回展は不明であるが、6月の第3回展にも木版画《雨降る多武之峯》を出品した。彫刻の方は、同年10月の第9回帝展に《裸女秀作》が初入選。翌1929年に美術学校を卒業し、同年の第10回帝展にも入選。その後、1931年に静岡市商工奨励館技手になり静岡に移るが、同年の第12回展から1934年の第15回展まで連続して入選。その間、1931年と1932年の白日会第8・9回展にも彫刻を出品している。1941年に新文展第3部(彫刻)の無鑑査となり、同年の第4回展、1943年の第6回展に出品したが、その後の活動は不明。1966(昭和41)年3月8日静岡県小鹿で逝去。【文献】『校友会月報』26-8、27-3(東京美術学校 1928.3、1928.7)/『文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 明治四十年—昭和三十二年』(社団法人日展 1990)/立花義彰「静岡近代美術年表稿 昭和戦前編 2」『静岡県博物館協会 研究紀要』35(2012)(三木)

太田治作(おおた・じさく)

1934年当時、兵庫県姫路師範の教員で、エッチングプレス機の所有者。『エッチング』第41号(1936.3)の「研究所通信」に、「姫路師範の太田治作氏より自作3点と生徒作品11点の試作を送られた。生徒の氏名は宮脇憲三、中島幸男、粕屋春一、足立保光、林義信、大橋如生、時岡楽治、石田武夫」の紹介記事あり。【文献】『エッチング』22・41(樋口)

太田天橋(おおた・てんきょう) 1893~1972

1893(明治26)年に生まれる。本名は太田政之助。京都府立宮津中学校中退。近衛歩兵第四連隊を経て、1922年漫画記者として報知新聞に入社。陸軍省、大本営囑託画家として満州事変、日中戦争、太平洋戦争に従軍。ペン画の上等兵として名をはせ、漫画伝単に携わる。西田武雄主宰の『エッチング』第59号(1937.9)の研究所通信に「ペン画の上等兵として有名な太田天橋氏が陸軍省新聞班の囑託で従軍した。太田氏もエッチャなので面白い作品が出来る」と大いに期待している。」と紹介され、当時の様子を「太田天橋氏の通信」(『エッチング』61 1937.11)や「漢口新聞(謄写版)」(『エッチング』77 1939.3)として掲載されている。西田にエッチャーと紹介されているものの、作品は未確認である。著書には『中

支従軍ペン画集』や『ペン画のお巡りさん』等がある。1972(昭和47)年に逝去。【文献】『お巡りさんの生活』(立花書房 1958) / 『エッチング』61・77 (加治)

大田南岳 (おおた・なんがく) 1873～1917

1873(明治6)年10月2日東京に生まれる。本名享。蜀山人大田南畝の後裔。野口幽谷に南画を学んで文人画をおさめた。趣味人で俳人としても知られ、尾崎紅葉、星野麦人らと親交。1905年頃より『中学世界』に挿絵や絵葉書の図案を描く。『みづゑ』第18号(1906.11)に石版《果物》の挿絵。小川芋銭を売り出した島田勇吉の俳画堂から出版の『現代俳画集』(1915～17 全4冊)に木版画の制作がある。1917(大正6)年7月13日逝去。【文献】『美術新報』14-11(1915.9) / 『絵はがき藝術の愉しみ展』図録(そごう美術館 1992) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

太田信子 (おおた・のぶこ)

岐阜高等女学校4年生に在学中、秋の展覧会のために制作したエッチング作品が「エッチングは私達の初めての試みでした。(中略)手を真黒にして、痛くなるまで何度もプレツとした、やっと出来た、その時の嬉しさと、思わずこ踊りして喜んだ」という作者言と共に、西田武雄発行『エッチング』第70号(1938.8)の表紙を飾っている。【文献】『エッチング』70 (加治)

太田正子 (おおた・まさこ)

大阪で武田新太郎らが中心となって発行された版画誌『黄楊』の創刊号(1933.8)に《サモワール》を発表。作者言に「鋭い金属性の器物から受ける、ひかりの感覚が思ふ様に刀によつてあらわせなかったことを残念に存じます」と言葉を寄せている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

太田茂兵衛 (おおた・もへい)

西田武雄発行の『エッチング』第59号(1937.9)に銅版画を発表。1937年当時、三重県富田中学校に教諭として勤務。【文献】『エッチング』59 (加治)

太田臨一郎 (おおた・りんいちろう)

青森の創作版画研究会夢人社が発行した『サトー・ヨネジロー蔵書票 第2年1 春の集』(1935.4)に蔵書票《書物(齋藤昌三用)》を発表。その後、佐藤米次郎が会員を募集し、蔵書票作品を集めて出版した『趣味の蔵書票集』の第3回(1938.6)に蔵書票《手術台(齋藤昌三用)》《かぶと(同用)》を、第5回終刊号(1940.12)に蔵書票《ミミヅク(同用)》を発表する。その後、朝鮮京城府の三越ホールに於いて、蔵書票趣味普及の目的と小品版画展を兼ねた「蔵書票展覧会」(1941.10.16～19)が朝鮮新聞社、書物展望社共同主催で開催され、太田も作品を出品。【文献】『エッチング』108 / 『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2002年) (加治)

大竹 茂 (おおたけ・しげる)

1929(昭和4)年10月に静岡で開かれた童土社同人第1回創作版画展に木版画《風景》を出品。また同年12月に刊行された『有加利樹』再刊1輯にも木版画《風景》を発表した。【文献】『童土社同人第1回創作版画展覧会

出品目録』(1929) / 『創作版画の系譜』(三木)

大谷光瑞 (おおたに・こうずい) 1876～1948

1876(明治9)年12月27日京都に生まれる。浄土真宗本願寺派第21世法主大谷光尊の長男。第22世法主。妹は歌人の九条武子。1902年より3度にわたり中央アジアに探検隊を派遣し発掘調査を行う。中央アジアで発掘したミイラ数体を持ち帰るなどシルクロード・西域古文化財の収集に尽力。弟の尊由と共著で1921年金尾文淵堂より木版画集『呉山楚水』(全40図)、『呉山楚水帖記事』(自筆稿印刷)を出版。1948(昭和23)年10月5日逝去。【文献】石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人々』(新宿書房 2005) / 『山田書店新収美術目録』81(2008春) (樋口)

大谷尊由 (おおたに・そんゆ) 1886～1939

1886(明治19)年8月19日京都に生まれる。浄土真宗本願寺派第21世法主大谷光尊の4男。妹は歌人の九条武子。博識で知られ、兄光端の大谷探検隊を財政面で支えた。画を中島華陽に学び、心斎と号す。兄光端と共著で1921年金尾文淵堂より木版画集『呉山楚水』(全40図)、『呉山楚水帖記事』(自筆稿印刷)を出版。1939(昭和14)年8月1日逝去。【文献】石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人々』(新宿書房 2005) / 『山田書店新収美術目録』81(2008春) (樋口)

大谷正之 (おおたに・まさゆき) 生年不詳～1933

京都帝国大学卒業後、1932年京都市役所建築課に勤務する。その傍ら版画を制作し、版画誌『黄楊』創刊号(1933.8)に《京都農大風景》を発表する。その「作者の言葉」の欄には「黄楊社に入りて《月見草》《大文字》《日傘の女》等の作あり、7[1932]年秋より病臥静養中の処本年[1933]1月26日長逝せらる」とあり、それに続けて、病臥において句にも親しむとも記載があり、4首が紹介されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

大谷三代 (おおたに・みちよ)

1925年に千葉県東金高等女学校の大谷三代、土屋政子らによって版画の会が組織され、『私達の版画』の第1輯を刊行したとの記事があるものの、現在確認はされていない。【文献】『美術界消息』『中央美術』11-9(1925.9) (加治)

大谷隆三 (おおたに・りゅうぞう)

1934(昭和9)年9月のホクト社第5回展に版画《おもと》ほか2点を出品。版種は不明。【文献】『ホクト社第五回展を観る』『美之國』10-10(1934.10) (三木)

大智勝観 (おおち・しょうかん) 1882～1958

1882(明治15)年1月1日愛媛県今治に生まれる。本名恒一。1902年東京美術学校日本画科卒業。1913年第7回文展第二科に《雨の後》で初入選、三等賞を受賞するが、1914年日本美術院の再興に参加。以降、同人として院展に出品する。1958(昭和33)年8月8日杉並区で逝去。版画は、赤穂義士の事跡を82図にまとめた豪華木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921 限定300部)に《宇津の山路》1図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録81号』(2008春) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

大塚重信 (おおつか・しげのぶ)

長野県小県郡和田村に生まれる。長野県師範学校第一部5年に在学中、同校生徒が発行した版画誌『樹氷』第1号皇紀2598年版(1938)に《郊外》を発表する。1939年同校を卒業。1950年当時は上田第一小学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

大塚晩秋 (おおつか・ばんしゅう)

1928(昭和3)年1月の日本創作版画協会第8回展に木版画《母と子》を出品。【文献】『日本創作版画協会第八回展覧会目録』(1928) (三木)

大塚伊次 (おおつか・これじ) 1909～1986

1909(明治42)年長崎市東中町に生まれる。1928年長崎師範学校本科を卒業。翌年、創画会(長崎医大、竹内清主宰)に入会し、1939年には二科会に初入選。戦後は一陽会に第3回(1957)から出品し、1971年には会員に推挙される。伍彩会相談役、長崎県展と市展の審査員などを歴任。戦前は長崎県内の小学校教諭として勤務し、山本鼎の自由画運動を取り入れ、長崎の児童美術教育改革に努める。教師を生業としながら洋画に力を入れ、その傍らで、版画を制作。そのことについて『版画長崎』第4輯(1934.11)の作者言で「私は版画家ではない。仕事の暇に洋画をやり、その暇に版画をやるのである。(中略)暇中の暇を見つけてやるので苦勞する」と書いている。その当時、長崎では田川憲一を中心に版画と文芸の雑誌『詩と版画』(1934.2)が発行され、第2号からは、版画を介して長崎の郷土を人々に紹介する目的をもって版画誌『版画長崎』(1934～1935)と改題し刊行される。大塚はこの会に参加し、その第2輯(1934.4)《習作》をはじめ、第3輯(1934.5)に《童女図》、第4輯(1934.11)に《静物》を発表する。その後、仁田小学校に勤務していた1937年7月21・22日に恩地孝四郎、西田武雄を講師に招いて行われた長崎市版画講習会(『エッチング』58 1937.8)に参加し、エッチングの技術も習得。『版画長崎』の発表には「大塚伊治」を使用。1986(昭和61)年10月12日逝去。1989年長崎県立美術館博物館で遺作展覧会が開かれた。【文献】阿野露団「大塚伊次 美術教師の先駆」『長崎の肖像 長崎派の美術家列伝』(形文社 1995 324-327頁) / 『大塚伊次画集』(形文社 1989) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

大月文一 (おおつき・ぶんいち) 1897～1947

1897(明治30)年京都市に生まれる。1915年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。京都市内の小学校教員となり、美術教育、特に児童の創作版画制作の指導に尽力したことで知られる。自らも木版画を制作し、1923年の日本創作版画協会第5回展に《支那人形と面》《大齋念仏踊》《満洲スケッチ》の3点が初入選。翌1924年の第6回展にも《支那人形の面》を出品した。神戸の山口久吉の主宰する「版画の家」との関連も深く、1924年の『HANGA』の第3輯(1924.9)に《チキタリス》、1925年の臨時号(大月、深沢索一、平塚運一、川上澄生、森谷利喜雄の作品5点を一組として頒布。予告では1925年3月の頒布だが実際は5月に頒布か)に《おどる神輿》、第7輯(1925.10)に《朝鮮所見》を発表した他、山口が武田新太郎と計画した『HANGA 児童作品集』(1925.6)の刊行にも協力し、出版に先立つ刊行予告と作品募

集を呼びかける趣旨書(1924.11)に長文の賛同文を寄せた。なお、当時の肩書きは「京都市第二高等小学校訓導」となっている。その後、1929年の京都創作版画会の結成に参加し、第1回展に《花》《風景》《静物》《支那婦人》《静物》の5点を出品。また、1932年に京都市で開かれた「全市学童創作版画実技講習会」と「全市学童創作版画展」の開催に尽力し、講師(当時の勤務先は第三高等小学校)を引き受け、大阪毎日新聞に「応用版画の手法」(未見)を執筆したという。1947(昭和22)年1月13日逝去。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984) / 『同窓生名簿 明治13～昭和46』(京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971) / 『児童版画集出版趣意書』(版画の家 1924.11) / 『HANGA』第5輯附録チラシ』(版画の家 1925.2) / 『特別展 京都の近代版画 一円山応挙から現代まで一』図録(京都市美術館 1986) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

大伴道一 (おおとも・みちかず)

1920(大正9)年4月の日本創作版画協会第2回展に木版画《静物》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『日本創作版画協会主催第二回版画展覧会』目録(1920) (三木)

大成 茂 (おおなり・しげる)

呉在住で日本版画協会常連の朝井清が、1936(昭和11)年5月頃に地元で創立した「呉創作版画倶楽部」の会員。参加時期は不明であるが、1938年12月の第7回日本版画協会展に木版画《柿》《内海風景》が初入選。翌1939年6月に開かれた呉創作版画倶楽部第2回展に出品。同年12月の第8回日本版画協会展にも木版画《筍》《唐もろこし》《温室》の3点が入選した。目録の住所は呉。【文献】『第七回版画展目録』・『第八回版画展目録』(日本版画協会 1938・1939) / 『日本版画協会会報』31(1939.9) (三木)

*訂正:101号の「朝井清」の項で「呉創作版画倶楽部」の創立を1931年としたのは1936年の誤りです。訂正いたします。

大西峯男 (おおにし・みねお)

武藤完一は、大分県師範学校で開催された第2回版画講習会(1933)を契機に、それまで発行していた版画誌『彫りと摺り』を九州全土に版画を広めるために『九州版画』(1933～1941)と改題する。その第8号(1935.10)に《トマト》、第9号(1936.1)には表紙絵《赤い実》、第10号(1936.4)に《波》、第11号(1936.7)に《風景》、第13号(1937.1)には表紙絵《静物》、第14号(1937.4)に《裸木のある風景》、第15号(1937.7)に《魚》、第17号(1938.5)に《溪流》を発表する。その後には作品の発表はないが、『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿には名を連ねている。当時、愛媛県東宇和島郡野村町本町2に在住。大西峯男の表記もあり。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

大貫芳一郎 (おおぬき・よしひろ)

日本版画協会の初期の会員。良一路の名も使う。出身は栃木県と思われ、1932年の日本版画協会の会員名簿の住所には「栃木県上都賀郡加蘇村」とある。また、春台美術展へ出品していることから、本郷洋画研究所に学んだと推定できるが、その時期は不明である。公募展への

出品は、1930年の第7回白日会展が最初で、木版画《御宿風景》が入選（ただし、目録は「一郎」と誤記）。続いて第17回光風会展にも《小川町秋色》《湯島公園にて》が入選した。なお、この光風会展には、第20回展（1933）まで連続して出品している。1931年には、同年結成された日本版画協会の第1回展に《久慈風景》《日光街道（八幡台）》《晃南風景》《鉄扇花》の4点が初入選。続いて第12回帝展にも《久慈風景》が入選し、『みつゑ』第321号（1931.11）に作品図版が掲載されるとともに、前川千帆が展評「帝展の版画」の中で作品を紹介するなど、一躍注目された。翌1932年の第7回春台美術展に《日光街道三題》《波》《鬼怒川風景》を出品し、受賞。同年、日本版画協会会員に推挙され、第2回展に《日光街道三景》《草を集めて》を出品した。1933年の「巴里に於ける日本現代版画展覧会準備展覧会」を兼ねた第3回展には、新作の《上野公園の桜》など5点と旧作の《日光街道》3点を出品。翌1934年のパリで開かれた「日本現代版画とその源流展（パリ装飾美術館 主催：日本版画協会）」には《Route de Nikko(B)》など4点を出品した。その後、1936年の第5回展に《ボタン図》《木蓮図》を出品。1937年の会長・岡田三郎助の文化勲章授章を記念する『慶祝栄勲版画集』にも《日光街道ノ内 赤塚》（版面には「良一路刀絵」とある）を寄せている。1939年9月に行われた会員名簿の整理時には名が無く、以後の消息は不明である。【文献】『白日会展総出品目録〈第1回～第59回〉』（白日会 1984）/『85回記念光風会目録集』（光風会 1999）/『日本版画協会史 1931 - 2012』（日本版画協会 2012）（三木）

大沼 毅（おおぬま・つよし）

長野県下水内郡飯山に生まれる。長野県師範学校本科第二部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第2号皇紀2600年版（1940）に《読書スル人》を発表する。1940年に同校を卒業。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

大野一男（おおの・かずお）

1931（昭和6）年11月の第4回プロレタリア美術大展覽会に版画《赤旗の下に立ちて》《レーニン》《カット(A)》《カット(B)》（各版種は不明）を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄『日本プロレタリア美術史』（造形社 1967）（三木）

大野恵男（おおの・よしお）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中に、生徒が発行した版画誌『刀』（1928～1932）に参加。その第13輯（1932）に《朝顔》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）/『創作版画誌の系譜』（加治）

大野静方（おおの・しずかた） 1882～1944

1882（明治25）年1月25日東京深川に生まれる。本名兵三郎。長兄は東京朝日新聞社記者の山本笑月、次兄は作家・評論家で知られる長谷川如是閑。水野年方に師事。1901年籾木清方と烏合会を結成。1904年「日本新聞」に入社、三宅雪嶺主宰の雑誌『日本及び日本人』の表紙絵、裏絵を長年に亘って担当する。浮世絵の研究でも知られ『浮世絵と版画』（大東出版社 1942）などを著す。『新小説』（春陽堂）、『つれづれ』第19年第4巻（1914）に

木版挿絵を制作。1944（昭和19）年9月14日逝去。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）/『20世紀物故日本画家事典』（美術出版社 1998）（樋口）

大野鉦二（おおの・せいじ）

1924（大正13）年10月に京都で開かれた詩と版画社第1回展に木版画《公園》《静物》《壺》を出品。また、『詩と版画』第8輯（1924.11）に木版画《静物》、『HANGA』第9・10輯合併号（1926.7）に木版画《天王寺之図》を発表した。【文献】『THE 1ST EXHIBITION OF SHI TO HANGA』目録（1924）/『創作版画誌の系譜』（三木）

大野麦風（おおの・ばくふう） 1888～1976

1888（明治21）年6月東京本郷に生まれる。本名要蔵。要三とも号す。油絵を長原孝太郎に学び、1909年第3回文展に《白き船》で入選。1910年第13回白馬会に《黄昏》《朝の光》《雪》が入選するなど洋画家の道を歩むが、1917年頃から日本画に転向、「麦風」と号す。この頃大野は友人の日本画家・倉本玉南を介して秦テルヲを知り、巢鴨にあった秦テルヲの借家に一時3人で同居、「青鳥社」というグループを結成して展覧会を開くなど活動を共にするが、「要三〔麦風〕の利己主義的な態度」が原因で解散する。日本画への転向は倉本や秦の影響か。1919年第1回帝展に日本画《桑畑》が入選。1923年関東大震災で淡路島へ渡り、1925年西宮市に移り住む。1928年南方パラオ、ヤップ、サイパンに旅し、南方の風景や風俗に魅せられて帰国。「釣り」や「魚」の絵を描く。1936年「新作魚類画展」を神戸の画廊で開催、「魚の画家」と呼ばれるようになる。当時西宮で古書店（西宮書院）を営んでいた品川清臣との出会いの経緯は不明だが、大野麦風原画による『大日本魚類画集』が西宮書院から出版される。1937年第1輯初刊から1944年第6輯終刊まで、各輯12図ずつ計72図が制作された。限定500部、原色木版200度手摺（彫師は藤川象齋、摺師は禰宣田萬年、光本丞甫、今井柳月、中村匠谷、安田青桜）。谷崎潤一郎と徳富蘇峰が題字を揮毫、和田三造が監修し、全72図に魚類学権威の田中茂穂と釣り研究家の上田尚の魚類解説及びグレン・ショウの英文翻訳が付けられた。原画を担当した大野麦風は、水族館や和歌浦沖合で潜水艇に乗って魚を観察したり、研究のため満洲にまで赴くなど並々ならぬ取り組みを見せた。制作は戦局の進展で困難もあったが、評判と売れ行きは好評を博したという。だが戦災により版木は全て消失した。戦災にあった西宮書院は、戦後京都に移って京都版画院と名称を変えて活動を続け、その後さらに東京に移る。大野自身は戦後も西宮に住み続け、西宮市や兵庫県内の美術展に日本画の出品を続ける一方、《浜辺風景》《秋の寺院前》などの風景画、《かれいと貝》《フナ》などの魚類画、《洋蘭図》《椿》などの花鳥画を京都版画院から刊行する。1976（昭和51）年1月西宮で逝去。【文献】『木版の美 版元—西宮書院と画家』図録（姫路市立美術館 2001）/『日本の版画Ⅲ 1921-1930』図録（千葉市美術館 2001）/『秦テルヲの軌跡』図録（笠岡市立竹喬美術館ほか 2003）/『大野麦風展「大日本魚類画集」と博物画にみる魚たち』図録（東京ステーションギャラリー 2013）（樋口）

大野義子（おおの・よしこ）

1935年当時、北海道岩見沢高等女学校補修科に在籍。『エッチング』第39号（1936.1）にエッチング作品を発

表し、「エッチング雑感」として制作の感想を述べている。当時同校では、エッチャーの阿部新一が教鞭を取っており、1935年8月17・18日、講師西田武雄による教師と生徒対象のエッチング講習会が開催された。大野はその講習会には不参加だったが、その後の授業等でエッチング制作が取り上げられた際の作品を西田の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』（1932～1943）に寄稿したと考えられる。【文献】『エッチング』35（加治）

大野隆徳（おおの・りゅうとく） 1886～1945

1886（明治19）年12月7日千葉県山武郡福岡村（現東金市）に生まれる。本名たかのり。初期は「たかのり」、後に「りゅうとく」と号す。千葉中学を卒業。堀江正章に洋画を学び、1911年東京美術学校西洋画科卒業。光風会に第1回展から出品を続け、1918年同会会員。1915年文展、1919年帝展で特選。1922年～1923年渡欧。1931年豊島区西巢鴨に大野洋画研究所開設。戦時中は従軍画家として中国へ渡る。1945（昭和20）年4月14日の東京大空襲で死亡。版画は、1913年2月創刊の文芸雑誌『ル・イブウ』（LE HIBOU）に《浅草にて》の木版挿絵を制作。大正期に「版画」を特集した『現代の洋画』23号・版画号（日本洋画協会 1914.2）誌上で、編集兼発行者の北村清太郎は、石井柏亭、織田一磨、杉浦非水、小糸源太郎、戸張孤雁などの自摺年賀状を紹介しながら、大野隆徳の自刻自刷の木版年賀状を「本年の〔洋画家が造った自刷の〕木版年賀状の中で最も優れたもの」と賞賛。年代は不詳だが《春の郊外》（T.ONOのサイン）の石版挿絵もある。【文献】『ル・イブウ』（木兎社 1913.2）/「版画の年賀状」『現代の洋画』23（日本洋画協会 1914.2）/『ル・イブウ』（木兎社 1913.2）/寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）/平塚運一『版画の国日本』（阿部出版 1993）/小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）/『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1997）『版画堂』目録103（2014.3）（樋口）